

ころみに健次が活動ぶりを見たしとの念、勃々として禁じ難ければ忽ち約を固めて、會社出勤の一條を悉く取消し、さらに人しれぬ自己が手許の客分となしつゝ、互に手を執つて大に浮世の裏面を駆けむとぞ誓ひぬ、
 健次も固より好むところの業、かきこし得たりと腕を扼つて、時節到来、意氣刷新、おもむろに世上を見渡しつゝ冷かに笑を含みぬ、

其七

兩國藥研堀の小路に此ごろ構へたる新格子は、門口の表札に墨くろくろくと黒田健次の四字、筆の走りも一癖あつて家内の本人なほさら尋常者ならじと誰かは知らむ、轉宅の祝儀も近來の張手ぞと近所の風聞とりく、俄に大工左官が立入りて、約束外の手普請に家主もとより恐悅の體、差配人さても善い店子を置き當てたとの鼠鳴き、帳場の人車は朝の八時に待ち受けて、いつこともなく乗り出す跡には房州うまれの下女一人と、忽ち目につくお島の容色、しかも新に磨きあけたる天生の本色いとど輝いて人に羨まるゝ果は畜類奴、どこから來せたか化の皮あらはせとの惡口にかよりぬ、

男は指一本の屈伸さへ生涯の得失に關す、何を苦しんでか用もなき身を百姓の撥ね釣瓶に等しかるべきと、曾ては朝寢ばう晝寢ばう宵ツ張りの三拍子みごとに打揃うて宛らの石佛、やうく目を覺せば忽ち大口あいて物を食ひ、食ひ止めば忽ち柱に倚り掛つて鼻唄うたひつゝ、米櫃に蜘蛛の巢を張れども驚かず、床板がたついて夢おどろけども騒がず、二六時中さらに茫として本性なかりし懶怠無精の黒田健次も、時節到来、一朝こよに岩田慎吉といふ當世獨歩の間道武者と手を執つて誓ひし以來は殆ど別人の如く、朝は東天の鴉と聲を争ひなが

ら井戸端に立出でて水を浴び、器それ固からずば漏るの恐れありと、牛乳二合鶏卵三四個の朝食を終るや否、まちうけし七時の人車に飛び乗って出づれば午後の三四時まで何事か岩田の本宅に身を潜め、時には俱に打連れて會社々々を駆け廻り、あるは我のみ俄に編製の矢聲はけしく砂塵を蹴って何處ともなく立去り、家に歸れば晩酌の酔ひ心地ほろ／＼とすれども其まゝ身を横たへて枕を取らず、夜の十時を過ぐるまで持ち歸りし書類に頭を埋めての一心不亂、餘所の見る目も忙しければ、ましてお島は女氣の昔に引き代へて今の物思ひ、をり／＼身を大切にと諫むれば、健次おもはず笑を含んでいふ、「なアに大丈夫、心配するない、五體は面の皮と同然、幾年の雨風に晒しぬいて此通りの千枚張だよ、それよりやア、さんざ苦勞した和女の身體を大切にしろ、よ、おもふまゝ美味を食って美衣を着て樂に暮すが宜い、夢にも各な考慮を出して木綿ものなぞ身に著けなさんな、乃公はまた、これまで散々なまけ

ぬいた代りに勇氣一番、さらに奮って大に働くべいだ、とかく夫婦は廻り持、自然に和女の番と乃公の番があつて、互に扶け合ふのが眞實だ、とも／＼一所に苦しんで同時に斃れちやア損だよ、そいつを古昔の腐れ儒者みだりに紙上文字の空言を放って、苦樂を俱にすると吐したなア未だ一を知って二を知らざるの放屁論で、そも／＼和女が乃公で乃公が和女といふ異體同心の者が苦樂を俱にして堪るものか、かはり番こに寝起きをするで持った世の中さ、だから今のうち和女は充分おもふまゝの贅澤をするが宜い、また女一人の贅澤ぐらゐは高の知れたこつた、それで此方の仕事に差響くやうな活動ぢやア前途が見え透いて話らないよ、迎も無効だよ、あんまり響しくないや、ねエ、アハ、ハ、ハ、いや時に今日は笑って居られない日だ、どりや出よう、人車は來てるかい、今夜ア少し遅くなるから、その心算でね、なアに夜食の用意は入らない、歸つて直に寝る時だと枕頭へ水の代りに冷酒を、コップぢやアい

けない土瓶によ、大土瓶にだよ』

黒田健次が岩田慎吉を得しといはむか、岩田慎吉が黒田健次を得しといはむか、一方は金色の光輝を放つて自由ならぬ人事を黄金力に揉み潰さむとするの勢ひ、一方は不敵の奇才ほどばしつて隙間もなき浮世の舞臺に大穴を掘り起さむとするの勢ひ、一朝こよに相逢うて互に手を執りつゝ約を固むれば、鬼に鐵棒、虎に生えたる羽翼、何事か人しれぬ魂膽をめぐらしてより一月あまりの今は、はや夏の炎暑も過ぎ去つて軒端におとづると朝夕の風、いつしか秋の心地に氣も冴え身も軽く、いざや其鐵棒を振り廻さむ時は來にけり、いざや羽翼を伸ばして大空に飛ばむ機は來れりと、世は七草の露に濡れて風流を追へども一人の大煩惱いよゝ紅塵百尺の眞只中に蟠り、庭に蟲の音しゆく月は夜なく射し入れど猶かつランプの

下に頭を埋めての意匠慘憺、むらくと湧く大俗の氣焰たちのほつて天井板を突き抜き屋根瓦を吹き飛ばさむばかりの折柄、赤蜻蛉うたゝ風に艱めど物の運命に感ぜず、蝸の聲やうゝ濁れて哀れを告ぐれど更に無常を思はず、ならば深草の鶉も耳に聴くよりは焼いて滋養分とし、名所の萩も桔梗も目に見むよりは草履に編んで足に履きたし、されば今日このごろの健次が身は稻妻の如く、豆に似たる二つの眼を世上の四方八方に配つて、日に三度の箸とる外は更に一刻片時を惜しみつゝ、これなくば何の浮世が面白かる、生命に代へてもと言ひし酒さへ朝の出掛に立ちながらの大コップ、夜は枕頭の土瓶に注ぎ込んで寝ながらの横飲み瀧飲み腹這ひ飲み、されど人しれぬ快樂は却つて此中にありけむ、瘦せもせず衰へもせず、五體いよく元氣づいて皮肉ますます肥え太れば、時に戯れてお島を見返りつゝ、『どうだい、此ごろは乃公も段々と肥つた故か、自分でも身が重くなつたやうだ、

あたら男振が悪くなつて和女に氣の毒だが、瘦せて泣かした昔を思やア却つて今の肥つてうが優だらうよ、ねエ、とかく男は下ッ腹が膨れないぢやア無効だ、年が年中しなびた菜葉ばかりを喰つて役にも立たない腦を絞つてさ、南風に逢つた水飴か夕陽の玉蜀黍みたやうに、によるくよろくしちやア人間も終焉だよ、そこで人と應對する時なンざア敵手の面を使々たる肚の中央の臍で睨みつけるくらゐの猛威なくンばいけない、どりや今日もまた臍で睨みつけてくれべいか、さしあつて急用の有象無象を」

其八

きのふは岩田の代理として横濱を奔走し、其夜の終列車にて歸京せるまよ今朝は猶更ら早く、委細の報告に自己が意見を加へて健次いよく得意の顔色を現しつよ、人車を飛ばして築地の本宅に駆け付ければ我より先に客來の體、さらば暫し待たむとて日は浅けれど深く馴染み

し家内の勝手さらに會釋もなく、奥の一室に立入りて其日の新聞を掻き集むる折しも、小間使の下女きたりて言ふを聞けば、『黒田さん、構ひませんから通つて下さい、今日の御客様は、よく貴方を御存じださうですから』乃公を知つてる客だ、名は何といふね、和女きかなかつたか『いよえ御名前は存じませんが、五十あまりの御髭の生えた立派な方ですよ、なに髭は鼻の下ばかりの八字髭ですよ』

五十あまりの鬚と大きくより流石の健次ぎよツとして、南無三寶もしや番町の佐原男爵にあらずやと思ひしが、肥肉の八字髭のみと聞き直して僅に心を安んじつよも、偕その年輩にて我を知るといふ奴、そもや何者ぞと眉を擧めながら、やうく起つて應接の室の襖おしひらけば、主人の岩田に對うて物語れる老紳士、さらに我目に覺えなく我胸に記憶なし、岩田それと見るより片手を差伸べて『さアすツと此方へ、きのふは實に御苦勞でした、委細

は後刻として、時に斯人を御存じかな』いひとつと笑を含めば、老紳士もまた振り返りて慙懃に會釋しながら『はよア黒田さんですか、拙者は能く貴方を知ッて居ますが、貴方ア拙者を御存じあるまいな、しかし名をいへば直に御承知の筈です、アハ、世の中は廣いやうで狭いもんさね』

地獄耳に鵠の目鷹の目の我、草の葉におく露ほども耳目にかよりし上は生涯さらなるべき筈もなきにと、しきりに小首を傾けて思案に凝れども何の覺悟なければ、おもはず苦笑ひして膝を進めつと、『いや、どう考へても、ぢやア甚だ失禮ですが、御名前を伺ひませうか』ハハ、拙者は何ですよ、あの濱町に住んで居る富田といふ者です、例の上田力から汐入村の諸君に段々と心易くなつて、しかし貴方だけは掛け違つて御風聞ばかり『やア富田、あの富田氏ですか、濱町の、こいつは奇だ、妙だ、實に奇妙、こりやアどうも不思議だ、はアな

るほど、さうでしたか、あはれ油斷のなるまじき世の中ぞ、實に案外でしたなア、當家で始めて御目にかゝるたア、アツハツハツハツハツ』わざと大口あいて天井板に息を吹き上げつと、咽喉佛の見ゆるまで高く笑へど流石の健次いさよか度に迷うたる體を、主人の岩田は早くも見て取つて傍らより、『黒田さん、富田氏から種々と聞いたが、随分ひどかつたさうだね、昔から君の横著加減は、しかし今ぢやア我ための參謀官、往昔の事を聞いて將來いよく頼母しい、むしろ尊敬の意を増しましたね』

健次おもはず兩手を擴げて自己が頭を軽く叩きながら、『こりやア酷い、殆ど夾撃の體だ、化の皮あらはれて今更ら何と詮方もなしといふ場合に陥りましたな、アハ、時に我黨の四人、川上はじめ皆の者は目下どうして居りますか、幸ひ富田氏に伺へば萬事分明でせう、いはど會て同じ穴の狐、さても其後さるほどに無分別の我のみ尻尾を振つて先登第一に飛び出

したがため、しらぬ野原に踏み迷うて爾來さんぐの次第ですから、おのづから心に恥ぢて
今まで訪ひもしませんが、由來十年、いづれも刎頸の友誼なるとして夢にも忘れませうか、
春の花、秋の月、夏は素より別けて冬の破れ布子一點さらに寒晒しの時なごア、うたと懐舊
の情に迫つて人しれず泣いた事も御坐いましたよ、しかし只今ぢやア南瓜の當り年、たまぐ
當家の主人に知遇を得て、兎も角も人間らしい顔色となりました今日、實は四人の舊友に猶
更ら逢ひたいです』

かつて汐入村の破れ巢に空腹かよへて苦學難行を共にせし五人のうち、我のみ常に横著の尻
重ねれば何事も先に立つて働かず、しかも一朝むくくと張り出せし慾の皮を擴けて最先
に飛び去りしがため、互に駈け違うて未だ一回の面識はなけれども、上田が縁に繋つて其名
は聞き及び其恩の端にもかよりし濱町の富田正次に思はぬ席上の邂逅、且は今の身に斯腕の
試験場所と定めし岩田が眼前に聲かけられて、流石の健次も内心あつと伏兵に逢うたる心地
せしが、忽ち逆に捻つて例の喋々たる辯口方便、隙間もなく疊みかけて四人の消息を聞かむ
とすれば、富田も一癖さらに仔細を語らず、兎も角も我家に来るべしといふ、さらば近日の
うち罷り出でむ、まづそれまでは御目にかよらぬ筈の事、前約は却つて興うすし、互に無言
々々と笑うて別れぬ、

朝の七時に飛び出して夜の九時十時を過ぎずば歸らぬ筈の健次が、けふに限つて其日の午後
一時、しかも小脇に一個の風呂敷包みを抱へながら飄然として、此ごろの激しき性急殿が人車
にも乗らず、おい今歸つたよの聲もろとも奥の一室に閉ぢ籠つて無言の體、お島いぶかしの
眉を擧めて窺へども、其後さらに閑として音なき不思議さに、そつと起つて障子の隙間より

差覗けば、マニラの葉巻を口に咬へつゝ右の片肌ぬいで大胡坐の健次、いつのまに何處にて整へけむ、持ち歸りし風呂敷の中より舞錐、鋸、鏝、鑿、槌、鏝の類さへ凡て掌上に握るべき小細工の小道具のみ、傍にはブリキの展べ板二三枚、厚紙やら木片やら襪縷屑やら、さては小兒が牛乳を呑むべきゴムの管三四本、その他に譯も分らぬ種々の品を取擴けて、じつと打守りつゝ一心不亂に思慮を凝らす風情は、宛ら竈に入れ損ねし今戸焼の羅漢に等しく、この變人また何をか自己ひとりの妙案を企てけむ、

お島おもはず笑うて障子を細目にあけながら此方より聲をかけぬ、『たま〜早く歸つて在らッしやツたと思やア、また何だか變だわ、全體そりやア何をなさいますの、眞面目でさ、ホ、ホ、貴方たしかですか』なに、貴方たしかですかア酷い事をいふ女だ、えと見るな、そこを閉てろ、見ることならんぞ、公乃が手を叩いて呼ぶ外は一切出入を禁ずだ』いえ

御用がなきやア参りませんがね、あんまり叫しいから、もしや』えよやかましい、靜肅にして、幸ひ今日から五日ばかり不意に閑暇が出来たから、其間に一寸面白い細工をして乃公が奇氣の一端を漏らすと共に、満天下の奴等を驚かしてやるのだ、これが所謂英雄別に彫蟲の技ありといふんだぞ、謹んで控へる、飯も酒も障子の外へ搬んでおけ、決して這入ることならないぞ、宜いか、えへん、どりや古今無類前後一品の妙案工夫に御手をおろし給はうかい』

心機一轉、宛ら別人の如く身を碎いて日夜の奔走に寸暇なかりし此ごろの健次が、たま〜得たる五日の閑散は時に取って流人の赦免に等しく、しかも元來の飲助こよに久しぶりの胃袋おしひろけて浴びるほどの酒と戦ひ、さては元來の寢坊助こよに霹靂雷を欺いて眼球の流

れ出づるまで夜晝なしに寐通すかと思ひの外、仰いで風雲を叱咤するの英雄また伏して別に影蟲の技ありと叫びつゝ、奥の一室に閉ぢ籠つて一心不亂の小刀細工を幾度か遣り損ねたる三日三夜の後、やうく出来したる一物を袖に秘して其まゝ家を飛び出で、蠢く鼻の穴よりマニラの煙はツツと吹き出しながら、一入さらに得々然として岩田の本宅を襲ひぬ、うてば響く男、叩けば音のする奴、働く時は人並すぐれて働きもすれ、いざ五日といふ閑散を與へし上は、また人並はづれて七日八日乃至十日は必ず休むべき筈の健次が、何事ぞ四日目の朝駆けに卒然として飛び來りし訝しさ、そもや如何なる急用ありてかと、主人の岩田おもはず眉を擧めて逢へば、健次さらに何の用もなしといふ、されど其口元すでに何とやらむ用ありけに見ゆ、

幸ひ岩田も今日は徒然のまゝ、打解けて四方山の浮世語りに興を添ふる折しも、健次おのが懐中より一條の細きゴム管を取出して口に咬へつゝ眉を動かし目を欬て兩の頬邊に時ならぬ笑窪を現しながら、さも心地よけにチュウくと咽喉を鳴らして物を吸ふ音しきりなれば、主人の岩田が小首を傾けて不審の體、「黒田さん、そりやア何だね、妙なもんだな、まるで蠢が煮滾しの干瓢を咬へたやうで、アハ、、、」「こりやア酷い、いかに拙者の男振が悪いからつて、外に何とか比喩やうのあつたもんだに、蠢が煮滾しの干瓢を咬へたなンざアあんまり酷ですな、家に歸つて細君に申譯が御坐いませんよ、さう俄に相場が下ツちやア『いや何、別段その心算で言つた譯でもないがね、しかし全體なんだな其物は』ハ、、、これですか、こりやア古今無類天下一品、いふまでもなく專賣特許の優等第一に屬する物です、しかし健次が身に取つては實に閑散の餘技、朝飯前乃至夕飯後ちよいと戯れに、いたづらをした小刀細工ですが、何と見えますな『それが分らんのだ、懐中から細い管がヒョロくと出て

其端が君の口中へ「アハ、お分りにならなけやア申し上げますが、これは一種の飲酒器械です、發明者兼製造人たる黒田健次これを名けて無盡酒甕または簡便徳利あるは道中飲み、その他に懐中樽などと種々の名があります、その理由方法目的等に至つては即ち斯うです、そも／＼人間が常食の外に嗜好するものは煙草と酒でせう、ところで蕘といふ物は元來簡便輕易なもので、マツチさへありやア何處で何うして居ても氣儘勝手に喫へますが、たゞ奈何せむ酒は流動體で盛るに器を要し飲むに時と場所を選んで、さう蕘のやうに車や往來を歩きながら自由に飲んでせう、そこで健次が聊か工夫をめぐらして戯れに造つた一品、解釋の前、まづ實物を御覽に入れて置きます」いひつゝ懐中よりの取り出したるを見れば、宛ら懐爐の如きブリキ製の物を、おのが度に合はして腹帯に似たる彎形とし、その一端より細長きゴムの管を引き、管の端は蕘のバイブに等しき吸口に？字形の鍵を附しぬ、どうです

主人公、懐爐のやうな斯物に酒を入れて、じつと臍の邊におツつけておきますから、外見さうに見苦しからぬのみか、冷酒おのづから自然の腹爛が出来て、冬ならば衛生上の一端にも叶ふ道理、冷腹蟲腹などの憂患は絶えてなく、またゴムの吸口これが不用の時は時計の鎖に等しく襟裏に引ッ掛けて、すは御用といふ時すぐに外して口に咬へ、歩きながら人車に乗りながら人と對談しながらでも、この通り澄ましきツて、チュウ／＼と吸へます、ね、もし途中で酒が切れたら喫煙家が蕘を買ふに等しく、ちよいと通りがよりの酒屋で注ぎ込めば宜し、第一が寒風凜冽として肌を劈くの折から車上に悠々寛々として絶えず醉を求め暖を取るの便法、その他は山野の跋涉に疲勞を忘れ片田舎の徒然に憂きを遣るの具となり、馬上舟中汽車中は素より、深夜ふいと眼が覺めた時にも俄に細君を揺り起し下女を呼び起すに及ばず、其まゝ片手を伸ばして枕頭を探れば闇中なほかつ自由自在、如何ですな主人公、そも／＼こ

れほどの簡易軽便なる工夫ありながら、古今天下の酒徒いたづらに飲むを知ッて飲むべき意匠を凝らさず、ために空しく不便を感じて、同じ常食外の二關と呼ばれながら、かの喫煙家にも多年恣の勢ひを示されたは實に遺憾千萬ちやア御坐いませんか、故に健次こよに先づ斯物をいひつゝ又もや懐中よりゴムの管を引き出して唇端に咬へ、あくまで平然たる眞面目づらにチュウ／＼と吸ひ込めば、流石の岩田あつと呆れて思はず膝を進めながら、『とにかく君は偉い、實に奇だ、頭惱が面白いよ、しかし同じ事で下戸の重寶も考へたら何うだね、わが好むところにのみ巧みなるは未だ眞の奇才にあらずといふから』いや、それに及ばんです、これが乃ち下戸にも通用の便利、他なし、砂糖水を注ぎ込めば宜いです、しかしこよに一事の難儀は元來あの砂糖といふ奴、酒と違つて時が経つと底に沈澱して甘味おのづから上下等分にならないから困ります、勿論それも當人の心得次第で、いざ飲まうといふ

時分に躍り上ッて二三べん地踏鞠ふめば宜いですが、なれども、そいぢやア車上から墜落るの憂ひあり、また人の前ぢやア狂者と間違はれるの恐れあり、ところで先生さらに思ひつきましたな、外でも御坐いません、いはゆる甘露と稱して氷店に用ゐる液體、あれならば大丈夫、いつ吸ツても味が同じですから、乃ち上戸下戸ともに兩用の方便、乃至また衛生家のためにやア別にスープなどの用も御坐いませう、ねエ主人公いかどですな、不意に賜つた五日の暇に、ちよいと斯のいたづら事アハ、ハ、ハ、

其九

健次の變物、時には闇雲に飛び乗ッて的もなき大空を跳ね返るかと思へば、また一室の片隅に額を埋めて小刀細工に一心不亂の體、しかも此ごろの忙殺中たま／＼得たる五日の閑暇を三日三夜の後、はじめて出來せし飲酒器械の一物たづさへて岩田を驚かし、得々たる顔色、

快然たる容貌、喋々たる三寸不爛の舌鋒に饒舌るだけ饒舌りあけて家に歸るや否や、煩し
 と遁け行くお島を捉へて殆ど一時間に渡る長演説、ヘンいつもながら身の事ばかりいふやう
 だが、どうだい此方の女房ども、ちよいと朝飯前に斯んな戯事をしても古今無類天下第一品、
 まして況や其他の大事に於てをやと、自慢たらしくおのが鼻ツ柱の曲るほど捻ッて其日は其
 まゝ例の石佛となりぬ、

五日の閑暇を四日すぎて、はや残るは今日の一日いざや濱町の富田が許を訪うて、圖らず出
 會ひし過日の口約、さても其後さるほどに絶えて久しき四人の舊友を尋ねむ、そもや我生涯
 の目的に取ッては序幕どころか僅に舞臺の下普請、いまだ宿志の百分一に足らねども、夫婦
 もろとも夜逃げして浮世の塵の木賃宿に落ち果てし昨日を思へば、まづ今の身分どうやら斯
 うやら人間らしき顔色を保つのみか、繋がる縁の富田に出會ひし上は所詮このまゝ遁れぬ場

合、我より訪はずば彼等四人より訪ひ來らむは必定ぞと、思ひ切ッて人車を飛ばしつゝ我家
 を出づれば忽ち例のゴム管を引き出して口に咬へ、車上悠々また寛々として四邊を見廻しな
 がら、しきりに目を細め咽喉を鳴らし小首を振ッてチュウくと吸ひあけぬ、愉快々々、い
 やはや何うも堪らないわい、

やがて濱町河岸の富田が門前、それ引き入れよと立關に轆棒おろさせて、みまはす傍の柱に
 呼鈴の玉、こつくと押せば忽ち出で来る書生、いまでも猶かの吉田雄藏と思へば十四五の小
 女、どなた様ぞといふ、健次さらに傲然として中音を含ませながら咳一咳エヘン、「御在宅
 ですかね、黒田です、過日岩田の宅で御目にかよつた黒田健次といふものです」「はい、手前
 主人は只今二人御坐いますが、どちらで御坐います」「なに二人、御主人が御兩人とは」「えよ
 近來、御養子が出来ましたから」「ふむッ、ぢやア大旦那よ、富田正次氏にだがね、しかし若

黒田健次續編

旦那の名は何といはれるな、ちよいと伺ひたい。はい、もと川上様と仰しやツた方で『ええ、何、あの川上、川上三吉の事か』『さやうで御坐います』

されど元來かく當家に訪れしは、固より四人の舊友に逢はむがための業、富田正次その人に差當ツて何の用もなければ、幸ひの婿養子となれる川上三吉むしろ結句の願ふところ、金兜の倉橋幸藏に出會うて久しぶりに入らざる説法を聞かされ、無鐵砲の上田力に面して萬一や馬鹿正直の拳を喰はむよりは、理も早く興も深く萬事の語り甲斐ありと、懐中の名刺を出して取次の小女に渡せば、程もあらせず川上三吉、今は有徳と聞えし當家の主人に見込まれ一人娘の戀婿となりながら、さても變らぬ往時のまよの活氣磊落、みづから玄關に出で迎へて満面の笑を浮べつよ、『やア黒田、よく來た、さアすつと珍客々々』
其まよ打連れて客室にも入らず、わざと奥の茶室に誘ひながら互に座を定めて顔を見合はせ、

絶えて久しき別後の懐しさ、おもはず浮ぶ微笑と微笑とを交しつよ、健次まづ口を開きぬ、『ええ何から話さうか聞かうか、さつぱり前後めちやく〜だが、まづ第一お目出たう御坐いますと祝ひ奉るかね』アハ、ハ、ハ、ハ、いやはや其後さても妙な譯になつてね、いはゆる縁といふものだよ、しかし君も何だか定まつた女が出来たさうで、かつ目下の猛勢は過日阿岩田氏から聞いて歸つての談話、兎に角壯だ、黒田健次の健次たる所以だ。『なアに女なんざア出來たんぢやアない、湧いたのよ、言を換へていへば拾つたも同然、君のや公然と發表するほどの價値はないさ、また目下の境涯、これについちやア聊か他人の見違つた仔細もあるがね、時いまだ到らず機の熟せざるがため、その違つたところを現すにも及ばんで、ほんの取附際だよ、だから目下を以て全斑の評を賜はつちやア少々こまるさ、時に倉橋吉田は何うしてるな、上田は先々月の末ごろ、實に面目もない所で出處は、

黒田健次續編

ね、殆ど狼狽したよ、定めし聞いたらう『いや何にも聞かない、が、先々月の末は、ちやうど汐入村を引拂った時で、上田が一人、萬事の跡始末に出掛けて其まよ一夜どうしたか歸らなかつたし、十餘圓といふ金を無くして翌日の晝過ぎ、ほんやりと戻ったから、倉橋が段々と仔細を聞いたさうだが決して言はない、頑として先生さらに言はない、しかし上田のこつたから酒色に捨てる筈もなしさ、ね、ところで皆が考へたよ、もし黒田の穴を知つて抛け込んだんぢやアあるまいかと『もらつた、その金たしかに僕が貰つた、しかも木賃宿で夫婦もろとも大世話場の眞最中、ふいと上田に出喰はしてね』だらう、どうせ、そんな事だらうよ、萬一これが君なら、また種々と疑點のうちどころもあるがね』アハ、ハ、ハ、ハ、相變らず横著者と見られてるなア、しかし川上、今に始めぬこつたが、實に彼奴の眞實熱情には鬼神なほかつ泣くね、今は何處に何うしてゐるな』赤阪に居るよ、それ倉橋が其後も引つゞいて例の新

聞社で論説欄を受持つてるから、上田を連れて赤阪に一家を構へ、備ひ婆と三人でね、また當家に居つた吉田は、僕の這入ると共に學資を給して神田の法學校に入れてあるさ』なるほど、いづれも、君の盡力で、まづく結構至極、時に話頭は變るが、奥方に御意を得たいな、かねて汐入村で居つた頃より才色兩全と聞き及んだ深窓の處女、いはゞ色香も深き名花の蒼が、あはれ君が一夜の露に依つて花瓣ばつと開いたところを、叶ひませんかな、いづれ僕の女も電覽に備へるから『馬鹿ア言へ、君のやうな危険な男に大事の女房を見せられるものか、まだ行末長く入用だア、ハ、ハ、ハ、ハ』

其十

腸せまく心弱きものは夜半の窓うつ木枯の音に入らざる無情を感じて寐覺め勝の身を艱めども、不撓さらに屈せざるものは天高く秋深くして壯心うたゝ勃々たるの時、乃至また野心

黒田健次續編

の徒輩は霸氣おのづから曉の霜を破ッて皮肉ために動くの時、さては失敗また失敗の年の暮
いつしか眼前に迫ッて茲に一番まよよ跳ね返らむとする自暴腹の時、あるは颯々たる風氣し
みく骨に染み渡ッて人生闊歩の秋や來れりと叫ぶべき、その十月の末つかた、十一月の上
旬に當りて都下の各新聞に左の如き廣告は掲けられぬ、

國家的の觀念より來るも善し、個人的の利益より來るも善し、其他あらゆる百般の事情
を提けて來るも妨げず、茲に天下の壯夫を率ゐて大に南洋探檢の業に従はむとす、苟も
左の條件に缺けざるものは履歴書を添へて至急申し込まるべし、

- 但し規約書は別に存す、就いて見るべし、
- 第一、品行方正にして普通教育あるもの、
- 第二、身體強壯にして遺傳病または會て大患激疾にかよらざるもの但し體量は十四貫

目以上を要す、

- 第三、三箇年間に家族係累を養ふべき直接の任務なきもの、
- 第四、もし普通教育に缺けたるものは必ず別に一藝一能の技を有するもの、
- 第五、身材五尺五寸以上を有し體量十七貫目以上を有して力量衆に超えたるものは
目に一丁字なくとも採用すべし、

第六、千金の子は斷じて取らず、
以上掲載の條目を有するものは身に一金を要せず事に保證を要せず茲に百五十人を募集
して大に雲煙渺茫の南溟を破らむとす、その航海に堪ふべき船體、その安全を期すべき
責任、その業を遂ぐべき資金、その目的を達する方法、及び衛生上の醫師傭聘より利
益配當に至るまで、悉く別に一の規約細則を備へたり、就いて見よ、

黒田健次續編

本所區小泉町一番地

南洋渡航事務所

主任者 黒田 健次

都下の各新聞紙上この廣告ありてより、都下の各新聞いづれも南洋渡航者募集の廣告文を掲げてより、死するに命は惜しく然りとて生き甲斐もなき世上の風來坊が、一時に肩を怒らし眼を敬て瘦せ腕瘦せ脛を引き絞り蹴立てと思ふやう、此儘生死の境に迷うて浮世の中骨を晒さむよりは、まよよ水や空なる南洋の果に押し渡つて日本外の風月を見むものと、いはゆる世の壯士なるもの、さては書生の喰ひ詰めもの野心勃勃たる失敗の落魄生、投機心まんとくたる無一文の失敗生、其他いづれも未だ家をなさざる獨身無頼の徒輩は、一時に眼を張り足を空にして事務所に押し寄するもの日に幾十人、門前ために市をなして、事務員と稱す

る五人の男は殆ど目を舞はしぬ、

お島は新聞の廣告を見るより、さてはと驚きながら良人の歸宅を待ち兼ね待ち受けて、あはや胸倉とらむばかりに怨恨の顔色、わざと祕して静に膝を摺り寄せつよ、「ねエ貴方、世の中は廣いやうでも狭いものですね、なぜって、今日の新聞に黒田健次といふ同じ名が出て居ましたもの、南洋とやらへ船を出すについて人を募る廣告が『ハ、、、あれか、ありア矢張り乃公だよ、乃公のこつたよ』おや、貴方あの貴方ですか『むよさうよ、乃公が天下の風來坊いほど世上人間の持て餘され者を百五十人程引ッ張ッて南洋へ飛び出さうといふ廣告さ、汽船から凡ての器械から萬事の資金まで岩田が出す約束で、うまく往きやア氏なうて玉の輿に乗る女と一般、羽翼なくて忽ち天上へ跳ね上る地獄の上の一足飛び、どうか首尾よく遣

黒田健次續編

ツて退けたいものだ、ついでには和女の身ね『ついでには、就いてはたア貴方、宿屋料理の梅干
 みたやうに、さう附物に扱はれちやア、第一がさ、あかの他人の世間へ廣告を出しながら現
 在連れ添ふ女房の妾に、今更、此方から問ひ掛けられた詮術なしの結句に、やうく口を開
 いて和女の身ね、濟ましきツて和女の身が呆れますわ、眞實にこれが呆れの宙返り、よくま
 ア満足に言はれましたことね、妾も、わたしも、三年越しの苦勞を共にした妾も、ことまで
 薄情の貴方と知らなかつたのが自分の誤過、決して怨恨も何にも御坐いませんから、後とも
 いはず只今お暇を下さい、それほど大望の貴方にやア南瓜の蒂に等しい無用の女は却ツて、
 お邪魔でせうから』いひつゝ流石に女氣の堪へくし兩眼の溜め涙さては口惜し涙ほろく
 と涙せば、健次おもはず目鼻を一所にして満面たど口ばかりなる高笑ひ『アツ、アハ、ハ、ハ、
 ハ、いやはや申されたるかな、いはれたるかな、なるほど和女の言ふところ首尾萬端いち

く御道理、しかし茲に一片の神算鬼謀、神も佛も知らぬ腸ありとは御氣付かれずや、これ
 さお島ばう、南洋渡航の廣告は皆うそ、虚言だ虚言だ、いや百五十人の死損ひを乗せて行く
 は實際に行くが、この先生が宰領して出るなんざア全くの虚偽だ、へんこの狭い日本國に苦
 勞を仕足らいて何處の白癡が南洋なぞへ馬鹿骨を折りに行く奴があるものか、黒田健次いま
 だなほ内地に必要だ、こゝ十年か二十年も経ツて愈々無効と相場の極ツた時に出掛けるさ、
 今の今まで和女に無言の理由まづざツと斯の如しさ、いはどおぬしこそ薄情だ、全く天涯萬
 里の孤客となつて國を去る心算なら、三四年前から相談する乃公だよ、つまらない、宜い加
 減に怨んどけい何のこツた、馬鹿々々しい、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし秘密々々』
 いはど浮世に用なき無頼ものを驅り集めて、雲煙渺茫の南溟に遺利を拾はむこと生涯の間に
 一度は豫てより期せし業、かつは用意萬端整うて事實また虚偽ならねども、散々の苦勞わづ

かに凌いで奮勵一番いざやといふ現今この健次が、みづから其宰領として押し渡らむは尙いまだ早く儲は嫌なり、ましてや近く内を捨て遠く外に彼等すたりものゝ徒輩と成敗を共にせむの廣告は皆これ虚言、うそく、虚言の皮一枚の下には云々の神算鬼謀ありと笑へば、お島やうく胸撫で下しながら、又もや膝を進めて聲を潜めつゝ、しかし貴方、あよして廣告に名前を出した以上は、世間の手前さう軽々しう、うまく通れる譯にも往きますまいし、第一、本尊の岩田さんが承知しますまいよ、誰だつて怒りますからね」ところが怒らさないで、この難關を河童の何とやらに切り抜ける方法、また岩田にも寧ろ一番あつと感じさせる工夫やまくありさ、大丈夫、たとひ乃公が身を運ばずとも、百五十人の亂暴者を連鎖で繋いだ猿の如く千里の外に操つて、事もし成れば忽ち岩田と利益の山分、事もし成らずんば我のみ去つて高見の見物といふ魂膽、なんでもないよ、鐵槌で叩いた石橋の上を四ん這ひになつて

渡るやうなもんだ、アハ、、、乃公は元來さう恰憫でもないやうだが、世間の奴等が餘り馬鹿すぎるから妙だよ、ハ、、、『なるほど、貴方のこつてすから、まんざら大した遣り損ひもありますまいが、さう口でいふやうに世上の事が、都合よく出来るもんですかね』出来よ、出来るつてば口でいふより巧く往く心算だ、全體この乃公は口よりやア業の方が立勝つて居るからな』『おや、おや、さう聞いちやア御挨拶に困りますわ、いくら妾の前だつて』『これさ、萬事萬端内幕御承知の和女の前だから、まアこれ位さ、萬一あかの他人の前なら、それこそ随分すさまじいもんだよ、持つて生れた三寸不爛の舌鋒おのづから閃いて萬丈の氣焔さらに當るべからずよ、かつまた時に笑うて咽喉佛を見せる事はありとも、腹の底の一物は神も御存じないからね』健次いつしか興に乗つて我まと思ふまゝの熱を吐けば、常に馴れたるお島も今更ら呆氣に取

たづら半分、それに少々ほんの聊か爪の垢はどの慾氣が加味するばかりのことよ、なるほど、しかし黒田、時と場合に依つて虚實の變化さらに極りなき君の言だから、事の難易輕重また従つて悉く信じられんがね、こりやア酷いな、酷評だな、ぢやアあの廣告も何か爲にする所あつての策略、南洋渡航は凡て虚言だといふのか、いや、さういふ譯ぢやアないが、由來十年の知己さらに憚らず露骨に言へば、もし羊頭をかけて狗肉を賣るの類ぢやアあるまいかと氣遣ふのさ、故に上田力は今日、満身の友情を以て君を訪ひに來たのだ、願はくば南洋渡航について一切の用意萬端を承りたい、事實ならば固より僕の無禮過言を謝して更に君の行を壯に送るべく、もし事實に不審あれば友誼に於て世を欺く君を無事は置かない心算だ、あかの他人の手にかけて擲らすのも残念だからなア、いひつゝ右手の力瘤を固めて兩眼くわつと見開きながら、涙をふるつて馬稷を斬るに似たる上田が勢ひを、健次おもむろに見遣り

て片頬に笑を浮べつと、いやはや相も變らぬ君が青竹割の性を以て、相も變らぬ僕が瓢箪鯨の性に對せば、なるほど、その疑念は道理だ、またその友誼眞情に熱するのあまり、どうせ他人の手に打たれる奴なら乃公が一番おしかけて叩き擲らうといふ厚志、ハ、いたみ入るとは實に此こつたがね、全體、けふ來たなア川上はじめ倉橋なぞと相談の上か、但しは君の一料簡か、なアに川上や倉橋なぞア、常に君を以て殆ど度外に措いてるから、あの新聞廣告を見た時も、おや黒田の奴め、また何だか妙な山を築きあげたぜ、うまく遣り遂げるか知らん、自分一人の利害得失なら宜いが、いはど世間で持て餘す亂暴者を相手の仕事だけに、よほど氣をつけないと飛んでもない事が起るだらうと、聞くより僕は座に堪らず、一人そつと駆け抜けて來たのだ、ありがたい、満足だ、しかし上田、虎穴に入らずんば虎子を得ずたア古昔からの言葉よ、寢て居て柵から牡丹餅のおツこちる譯はないからね、ところで僕が近來

黒田健次續編

やうく、世上に浮び上った初陣に、腕だめしの一仕事、面倒が起つたり間違ひの出来る位ど
 恐れて何うするものか、快刀を以て亂麻を断ち若しくば盤根錯節に處して斬聲雷を欺くの勇
 はなくとも、今日世間で持て餘ます亂暴者の百や二百を取つて以て腰印籠の丸薬にするほど
 のこたア、まづ健次が半睡の指頭だな、しかし其間の消息を今こよで坐上の談にもなるまい
 から、近日いづれ事實の上に於て證明せう、安心してくれ、又その用意萬端に至つては生來
 かつて殆ど僕に凡例なき周到緻密、この通り斯の通りだよ』いひつゝ起つて持ち來りし折靴
 の中より、人員募集に關する規約書、方法手段目的に對する明細書、裏面に於て調印贊助せ
 る當世紳士には彼の岩田を發起人として十四名の富豪、さては其出金の額面、及び衛生上の
 醫師傭聘に至るまで、悉く證をあげ説を附して示せば、さすがの上田アツと感じて俄に膝を
 進めつゝ、『なるほど、なるほど、いや實に君は、とこころで黒田、こよに一事の依頼がある』

「何だ、俄に改つて」外でもない、僕を一所に連れて往かんか、是非とも僕を連れて往け
 いふ顔を健次じろりと見詰めて、おもはず吹き出しながら、『ハ、、、、上田白狀しろ、け
 ふ來たなア萬事川上の策だらう、詭辯奇策、曲折變化の論鋒、どうも君にしちやア始終言論
 の持ち込み鹽梅が巧過ぎるよ、ハ、、、、出來すぎてゐるからな』いひつゝ猶も高く笑ひ
 ながら、筆を採つて一通の書狀さらりと認めつゝ、『ちやア上田、これを君に渡すから、兎
 も角も宛名の岩田慎吉といふ人物に逢つて置くが宜い、僕が個中の策士で凡ての舞臺を築
 きあげたにしろ、その岩田が實際の根本で、いはゆる全權を握んでる奴よ、ね、かつまた出
 帆の時日も迫つてゐるから今のうち面を見せておくだ、なアに敵手の面を見る心算でも同じこ
 ツたさ』むよなるほど、しかしこの岩田といふ男は如何な人物だね、君も知つてゐる通り僕は
 元來の無器用で、初對面の掛合なンぞア頗る不得手だからな、あらかじめ文句の出し鹽梅を』

「ハ、ハ、ハ、相も變らず太平無事な事をいふよ、なアに高が金氣一色で光る外にやア別段これといふ見所のない男だから、前後左右さらに構はず、どしく眞正面から饒舌り立てるよ、もし饒舌り損つて奴の氣に觸る事があつても、そこは大丈夫、あとから直ぐ僕が出掛けて忽ち黑白異同の辯だ、何とでも自由に誤魔化してやるさ、しかしこゝに一事の念を押して置くがね、たとひ如何なる場合があつても、露いさよか夢にも僕の事を悪く言つちやア困るぜ、なぜツて、問ふだけ野暮だよ、肝心の僕が悪者になつて事の運ぶ筈はなし、また現在の君が立つかい、ね、宜いか」よし、よし、ぢやアこの添書で一番おしかけて「さうだ、構はないから思ふさま饒舌つて来るが宜い、殆ど木偶人に對して語るが如き勢ひで遣つ付けろ、黒田健次の家語に曰くさ、美人に接する時は剛に飛び込んで大便小便する時の容貌を想ふべく、また英雄豪傑などいふ奴に對ふ時は妻妾を抱いて寝る時の面貌を想ふべし、まして況や

平々凡々たど金あるが故に人間らしき者に於てをやだ、四條五條の橋の上に往き來ふ人を深山木と見るは禪家の悟道のみでないさ、我を除くの外は天下萬衆すべて草木の比類よ、動くは吹く風の業、豈その他に不思議あらむやだ、アハ、ハ、ハ、ハ、健次の馬鹿者また例の駄法螺を吹いたりける、

其十一

いつしか秋ふけて蟲の音しゆき一夜のこと、健次お島と枕を並べての寢物語りに、あはれ昔は物を思はざりける和歌の心を獨語ちつと、そもや逢ひ初めしより三年四年の今日までさまぐの憂き苦勞いろくの辛さ悲しさ切なさを、よくも凌いで甲斐なき我に連れ添ひしよ、何が嬉しさに末を頼んで斯くの男にといへば、お島も寢覺め勝の枕を欬てと燈火の影に反ける片頬に笑を浮かべながら、「そりやア貴方、縁ですもの、妾の知つた事でないから」なるほ

ど、縁だなア、縁といふ奴は妙なもの、自分ながら自分が分らない處に價値があるのさ、時に島ばうや、その縁もね、友白髪の爺と婆との末まで目出たく満足に添ひ遂げようと思ふからは、こよ半年や一年ばかり、ちよいと互に顔の見られない位は辛抱するだらうな」おや、何ですとへ」外でもないがね、かねて新聞の廣告に出したこと、あれが、いよく用意萬端整うて近日のうち出帆するやうになつたのさ、とところで、乃公もね」あれ、貴方、貴方ア往かない筈でせうが、過日、妾に、船は出るに極つてるが乃公だけは往かないと仰しやつたに」さよそこだよ、お島、よく聞きなよ、釋迦と孔子の素面を逆撫でにして蠅に似た啖を吐き掛けるほどの乃公もね、女一人の和女にやア萬事おくれを取つて、どうせ分る事を、女々しい其場の一時凌ぎに、實際を言ひ得なかつた心のうち、何とか察してくれ、ね、決して夢さらく、和女を欺した理由ぢやアないんだ、こよが乃ち武者の本泣き、事の間際に迫るまで

一寸の間も物を思はせたくない男の弱身さ、ね、鬼さへ妻に角折る世の諺を思やア、さのみ腹の立つこともあるまい、ね」ぢやア何ですか、いよく往らつしやるの、貴方も」逆も逆れぬ時日切迫、どうか乃公に半年か長くて一年の暇を呉れ、よ、その代り和女が下女一人や二人を使つて安樂に暮すだけの事は勿論、やがて乃公が無事に歸つて来た曉は玉の輿、なるほどと言はせるからね、これが日本の土地を放れて別れると思やアこそ少しは心細いだらうが、高砂の謠を抜きにして出来合つた男女ぢやア、どうせ憂き身の苦勞は覺悟の前、一年や二年の顔を見られない位は誰しも往々あるこつた、遠く離れて空うちながめ月が鏡になるならばといふ小唄な」さア、却つて意氣なもんだぜ、あはれつほくて、末を樂しみに互の情が増してよ、ね、たとひ火水の中でもと言つた事を忘れたかい、馬鹿な、今更ら泣く奴があるものか、意氣地のない、持つて生れた平常の勝氣を何處へおつことした、男勝りと言は

れた身ぢやアないか、しツかりしろツてば、玩弄物を取られた小兒か蟲腹おこした姫様のやうに、何だな、べそくするなよ、はきく飛び上ツて祝ツてくれ、男一代、いはど乗るか反るかの境目だ、腕ツぶし叩きあける乃公が初陣だア』

當世紳士の大金穴岩田慎吉が近來の事業として、黒田健次これが宰領となり、上田力これが補助となり、かねて擇べる合格の壯士百五十人を乗せて、頃しも十一月二十日、横濱に錨をあけし南洋渡航の汽船は其名を大和丸といふ、されば交際場裡の立物たる岩田が關係の見送り幾千人、黒田上田の二人に離れぬ縁の川上倉橋吉田はじめ富田の一家、さては百五十人それ々々の朋友知己、その他の萬衆が聲を合はせて海岸に鬨を作りつと、天地に響く萬歳聲裡に唯一人うらみの涙おびて残る煤煙が癩の種の女ありとは誰か知るべき、

欠

欠

健次君、君と我との交際そもく、何の因縁そや、天下たゞ語るものは君と我とのみ、人間たゞ相知るものは君と我とのみ、生を共にし死を俱にして生涯の進退窮達も刹那の喜怒哀樂も一體一機、されば今こゝろに三十一の君と我、いかに浮世を渡らむ前途の空の面白さよ、ふかば吹け降らば降れ傘一本、やぶれかぶれの骨となるまで、

女に可愛がられて潰れるものは色男、それも若木の花の一盛り、枕がへしの鼻唄は凡そ三年を限りとすれど、世に憎まれて立つものは男の本色、うたれて這ひ出し叩かれて跳ね出し蹴られて踏まれて起き直りつゝ鬚に霜降る師走白髪の五十五六を全盛といふ、その全盛には片手を振ること四度半、なほ二十三四年の前途いかなる風雨に逢ふやらむ、こゝろに黒田健次とて百尺紅塵の眞只中しかも大俗蟠居の拗者が、絲目の断れし奴唄ふはくと南瓜畑に落ちし

一盃ぐらゐは妾の瘦腕でも立過しますからさ『馬鹿、勿體もねエ、乃公ほどの男を良人に持ちながら、ふざけた事をいふない、人間は白い御飯を食つて黄色い糞を垂れるばかりが能でないわさ、三度や四度の失敗は愚、十度百度、およそ五十年の生涯を物の遣り損ひで押通しても娯樂またその中にありだ、恰も死毒を舐むるが如き苦中に一點の快樂を求めて十年の生命を縮むるとも惜しからずたア男の本音だ、女房なンざア臺所の水甕と一般、だまつて、平靜に曲らないやうに自分の役目を仕れさ、とはいふものよお島、随分乃公について長年の苦勞をしてくれたなア、いや感心、感服』おや、また始つた『何がよ』何がつて、がらにもない世辭を今更めてさ『ハ、ハ、ハ、ハ、お世辭、これが世辭といふものかい』『でしようよ』『で御坐るかな、時に今日の夕飯の菜は何だ』くさやの干物と、やたらづけ』やれ〜この元日以来、あぶらがよつたもなア一砥めもしないから、どうやら動いたンびに骨放れがしさ

うだ『お氣の毒さま、皆あなたの御勝手から』

桂を曲折り珠玉を炊いで黄金盤の膳立に下ツ腹を肥さむとは古來なまけものゝ寢言、あいた口に棚の牡丹餅を覘ふ世の諺ながら、緞子の夜著に臘虎の襟皮つけて三冬の夢あたよかならむ程度のことは、片手を翫して何の苦もなく出來さむと思ひし黒田健次も、元來おのれ一人の世の中ならねば南洋遠征の大望まんと一敗地に塗れてより、いのち一個を物種に暫し世間を忍ぶが岡の假住居、櫻木町の隠家に斯くても連れ添ふ妻のお島を相手として、くさやの干物、やたらづけ、二合半酒の晩酌に舌うちならず今の境涯、もはや散々の體ぎゆうの音も出ですと思ひの外、吹くは吹くは、なほ懲りすまに吹き出す法螺の貝、上野の山の高臺より百萬の葢が一枚々々十圓紙幣に見ゆるわと、例の白癩を吐いて悠々寛々たる折しも、門口

の格子戸に電霆の落ち掛るが如き響音して、『たのむ、たのむぞ』おい黒田ア居るか、健次の狸奴出ろ』たしかに怒りの聲は三四人、

やれ見つけをツたぞ、されば面倒ながら一呻り呻り出してくれべい、ついでに弄んで幸ひの酒の相手、近來の無聊を慰めむものと、いつしかは斯くと胸に覺悟の健次、流石に女氣の頻りに氣遣ふお島を隣室に追ひ遣りつよ、のそくと立出でよ見れば果して覺えの壯士なりける、

『かくれたるより現るとはなし、やア諸君、たうとう穴を探り出したな』恍け出す横著面の平然たる體に、こよが壯士の本色とや忽然くわツと憤怒の總幕出揃ひとなりて、四人もろとも聳ゆる肩に突き出す鳩胸おとしこむ大胡坐、片手々々に握太のステッキを引き付けながら、等しく健次の面上を射返す眼光炯々たるべき筈ながら、あはれや近來いづれも滋養分を缺いて窪みし眼の底に光澤なく、たゞ額上に現す青筋のみぞ常食の薩摩芋に似たりける、

『おい黒田君、いや黒田、貴様ア全體われくの結局を何うする心算だ、今となつちやア此方も的のない駄法螺に引ッ掛ツた失念があるたアいふもの、どこで拾ツたか貰ツたか但しは竊んだのか、あんな躉船一艘で御大層な南洋遠征の看板をあけてよ、いはゆる羊頭狗肉の奸策毒計、それもさ、この東京の陸の上で解散とか何とか言ッて潰れりやアまだしもだが、わざく神戸くんだりから馬關の果まで浪の上を引き摺り引ッ廻した結果、船を叩き賣ッて募集に應じた我々百二十人を追ッ放したまよ、忽ち消えて無くなるたア随分と蟲の宜い仕事だ、しかし今更ら事實の及ばん愚を繰り返さんから、船を賣ッた代價の六分乃至七分を我々に呉れ給へ、今日我々四人は總代となッて君に欺かれた報酬を取りに來たのだ、おい黒田君、どうだね、返事の仕ように依ツちやア憚りながら形勢おだやかならずといふ一段を演ずるか

らね、糞度胸を据ゑて確答しろだ、事もし面倒けりやア舌より先にステツキが物を言ふ我々だから』

黒田健次いよく平然としてマニラの葉巻ばつと吹き出す薄紫の煙の中より、うまれついたり不出來の面がまちに一段と横著氣と愛嬌とを取交せながら、笑ふが如く嘲るが如く冷すが如く洒々として四人を眼下に見流しつゝ、『ハ、、、、『おや笑つたな』笑つた、をかしいから黒田健次いさよか御免を蒙つて笑つたよ、かんら呵々といふ昔の小説めいた笑聲はセンが、少々臍の邊りが搔きたくなつた其所謂は、そもく諸君』えツ氣取るな、貴様の氣取と駄法螺も今日は我々に通用しないぞ』そこで、僕の氣取鹽梅と駄法螺の吹き工合を諸君等に通用されて堪るものか、しかし閑話休題として、何かい、あの船を叩き賣つた金を出せといふんだな』無論だ、今となつて過去の愚癡は滾さんから、その金を我々百二十人に分

配しろといふんだ』ところが、お生憎さま、逆に振つて鼻血も覺束ない今の境涯、五錢の白銅といひたいが其實あはれむべし一錢銅貨一枚もありや無しだよ、ハ、、、、また笑つて濟まないがね』

死ぬ死ぬと大聲あけて叫ぶものに死んだ凡例なく、鼻の先へ突き出す拳の忽ち閃いたこと妙く、とかく人は看板に虚偽多き世の中なれば、蹴るの殺すのと壯士の銘うって立騒ぐ男、しかも暗闇から飛び出して無言に眞向一撃の遺恨を返すでもなく、四人ぞろく打揃うて金が欲しさの談判に交番所の近き晝日中、なんの仕出來す恐怖やあるべき、まして此方は五尺の身體を膽と度胸で張り切る良人のこと、ホ、、、、河岸の棒杭女郎が紋日前の惚れ文句ほども利くまじと、流石は黒田健次といふ浮世の曲物に七年つれ添ふ妻のお島、

最後の黒田健次

とはいふものと油断大敵、良人が持つて生れし平生の性癖、さのみ心に針はなけれど舌の根の動き鹽梅どうやら世の人と打ッて變りて、動ともすれば入らざる皮肉の毒口ついて敵手を怒らすあまり、もしやスツテキ騒ぎになりはせぬかや、たとひ良人の身に恙なくとも借屋住居の貧乏世帯に障子の骨一本を折られても叶はじ、そこらの鉢皿たよき毀されても損の埋草おほつかなしと、隔ての襖を細目にあけて差覗けば、良人の健次は鼻柱の曲まむばかりに例の葉巻を燻して平然たる體、四人の壯士いよく唇を反らし眼を怒らし拳を固め膝を進めて差迫る體、

南無三寶、はツと驚くほどにはあらねど、思ひしよりは威勢の打合ふ體に、お島も今は妻の身として捨ておかれず、さりとて此場の留女に花を咲かして立出づるとも、揃ひも揃ひし四人の唐變木には粹の捌きも通すまじ、いざ此上は酒々、それよ酒のこと、世にいふ館の料理、

酒で殺して退けるが一の手、しかも幸ひの四人いづれを見ても饑渴さうなるあの空腹へ熱燗の五六合づとも注ぎ込めば、乾き切つたる腸でんぐり返つて忽ち其場に正體なかるべしと、片頬に冷笑を含みながら長火鉢の小抽匣を探れば、あはれむべし銀貨銅貨とりまぜて僅に四十七錢五厘、

落ち果てよ世を忍ぶ今の身に其日々々の自己が世帯、今更の事ならねど時に取ッて工夫の急場、えよと舌打しながら帯ひき解いて身に重ねし銘仙の下著一枚、脱ぐや否や片手の風呂敷包にクル／＼と巻き込んだるまよ、勝手口より飛び出して二軒目の裏屋に住む獨身婆への耳語は、また一寸たのみますとの早業、はや住んで三月に足らねど人しらぬ自由のお島なりける、

むかしは明智光秀が唯の十兵衛とて師走浪人の世に出でざりしころ、その詫住居を遙々と訪

ひ來し朋友への待遇に、妻が大事の黒髪きつて酒を買ひしと聞く、それには引き代へ今の我身は何事ぞ、良人に迫る四人の壯士を酔ひ潰さむがため、質草の下著一枚ひッpegして二升の酒を買ふも浮世、あはれ主殺しの謀反は望まねど惟任將軍の全盛あれかしと、心に祈るほどもなく婆が急いで持て來る二圓五十錢、そのうちの二十五錢を老の足代やら質の帳面の損料やら、

ついでに三四日まづ家内安全の基礎も築けり、さらばとて酒屋に走つて得たる酒三升、これを三十三珊の大砲として今ぞ打出す女房役、あゝ貧して鈍して變つた男を良人に持てば、また金殿玉樓の夢にも知らぬ呵し面白さは、似たもの夫婦の妻も妻なり、こいつも變つた横筋違、この飄逸さ加減なくては一日も健次に添はれぬお島ばう、あやなす腕は襖一重を開けての後々ホ、ホ、ホ、

不具戴天の怨恨で閃く白刃にあらず、たかど金欲しさに振り舞はすステツキの業、しかも取らるゝ身に無いほど強き事はなしと、黒田健次いよく度胸を据ゑて嘲弄さしく舌を巻き立つれば、壯士ますます怒つて今は義理にも無事は置かれぬ此場の切迫、四人打揃うてアハヤ飛び掛らむとする折しも、忽ち襖を隔てゝ聞ゆる嬌音、「皆様ちよいと御待ち下さい、失禮ながら唯今それへ健次の妻が御挨拶に出ますから」

萬緑叢中の紅一點、不意に現れ出でたるお島が風情、すつきり水際たちし二十六の女盛り
に持つて生れし世辭も愛嬌も今ぞ生命の頂上、花ならば咲きも亂れず散りも失せざる色香
を含んで、焼海布と生卵子の早業に敵手を選ぶ氣轉の湯呑茶碗を添へつと、貧乏徳利そのま
よの熱爛いちく四人の膝前に注いで廻れば、主人の健次おもはず笑を浮べて流石は此方の

女房出來したりとの體、壯士は勢ひ外れ張合ぬけて聊か度を失うたる體、互に顔を見合はせながら飲むか飲まぬか眼と眼の相談、あはれ迷うて唯これはく、

お島こよぞ得たりと、鼻を穿つて空腹に染み渡る熱爛の香氣紛々たる貧乏徳利を兩手に持ち添へながら、『さア諸君や、何故そんなに御遠慮なさいますの、まア宜いちやア御坐いませんか、お酒の一二盃めしあがつたつて、仰しやる事を言はずに濟ます方々ぢやア御坐いませぬいし、また蔭ながら承りますれば、何か事の行違ひから良人に金子を出せとか仰せの御様子、しかし御覽の借屋住居で有ると思召すが不思議、無いが全くのところ、うそ虚偽の申し上げやうもない夫婦が、せめて心ばかりの御待遇で御坐いますから、どうか百貫の質に編笠一介とも思召して、男は當つて碎けるとやら、一盃めしあがつていたどかないと妻の役目が立ちませんから、おや、おやく、良人まアひどいことね、お客様が召しあがらないうち

から自分一人でき、ちと御謹慎みなさいよ、ホ、ホ、萬事おの通りの人で御坐いますから、定めし御氣に觸つた事も澤山、あれ、およしなさいといふに、こりやア良人にあける筈の御酒ぢやア御坐いませんよ、ほんとに呆れて物も言はれないわ、あれ、また、實に亂暴きはまる事ね』

生命の水を笑窪に湛へて隙間もなきお島が獨り舞臺、敵と味方を左右に綾なしての働きぶりを、良人の健次じろく、見ながら自己まッ先かけて獨酌の續け飲み、『なんだ、乃公に飲まさないといふのか、乃公に『いよえ飲むぢやア御坐いませんが、お客様に差上げたんですから』お客様、ふむンお客様ドどこに客が居る、其處に揃つて鳩が豆鐵砲を喰つたやうな四人は客ぢやアねエぞ』あれさ、ほんとに仕様がな事ね、良人ア口が悪くつて困りますよ』『わるい口で御氣に入らずば縫つてくれ』『えよもう知りませんよ』『知らなきやア黙つてろ』

「黙ッて居られません、四人の方々に對して『おや、おつう汝は四人の肩を持つな、をかしいぞ、あやしいぞ』馬鹿々々しい、ふざけた事をお言ひなさんな、たとひ怪しくッても呵しくッても宜う御坐います、さア諸君、どうか、あんな狂氣に構はずと召しあがッて下さい、今日のところは何分この妾に免じて」

あはれむべし四人の壯士、そもく今日は何なる災日ぞや、惚氣まじりの夫婦が癡話口説を聞かされて、笑はれもせず怒られもせず、さりとして今更ステッキを振り舞はさむ勢ひもなく、空腹に徹する熱爛の香氣このまよに捨てと飛び出す勇氣もなく、たゞ惘然として生死の境に苦しむ體を、黑白相違の遣方ながら心は一致の夫婦が早くも見て取ッて、飲ます飲ますぬの駈引に三升の酒を忽ち五升一斗の價格に上す腕の凄さよ、

世に怖しきものは佛と女房と鐵砲とは、學問の外に浮世を知り抜いて理窟の外に物を辨へたる奴の諺、なるほど御内寶の俗説そのまよ内の寶は妻の細腕一本で濟む證據、ことにお島が片頬に笑を浮べて不意に持ち出でし貧乏徳利の功能は、忽ち四人の壯士を生捕ッて掌裡に丸め込みぬ、

さア諸君、まア諸君、なんですよ諸君と、口には同じ言葉を繰り返しながらも心を配る業は千變萬化の活動に、酒は熱し腹は冷し世辭はよし愛嬌はよし、まづ息つぎの一盃、舌鼓の二盃、三盃で酔ふ筈はなし、五盃六盃まよのかは、七盃八盃飲むだけの徳、九盃十盃どうせ斯うなりや今日の談判まづ他日のこと、せめて腹癒せの萬分一に出すほどを飲み盡して酒樽の底を叩きくれむと、四人もろとも飲むはく、

布子一點寒曝しの空腹に飽くまで喰ひ飲んで綿の如く海鼠の如く、酔うて猶更ら件の如き四

人の壯士、へどれけの境涯づぶろくの境涯、いづれも通り越して今は前後忘却めちやくの體、もはや時分はよしと健次が目配に、お鳥それと萬々承知の胸に追ひ出す工夫、

「嗚呼こんな時こそ、いちくお車を差上げたんですが、ねエ良人や、どうしたもんでせう」眉を擧めて恥かしげに凋るよお鳥を、健次は例に依って傲然たる横著面、「なアに構ふもンか、うツちやツとけ、押し掛けて来た今日の談判が帳消になつた次第ぢやアなし、いづれまた近日に出直して来る奴等、ことによれば酒の振舞ひ損だぜ、その上に人車、たまるものか、止しにしろ、止しにしろ、全體また平生から人車なんぞに乗り歩く人品ぢやアないから、向脛に馬の字かいて駈け出すが宜いや、たまに乗つけても乗り鹽梅を知るまいから、おツこちて怪我でもすると可愛さうだよ、ハ、、、、人車に乗るより曳いた方が分相應だ」あれ、また餘計な悪まれ口を、だまつて在らツしやいてば、じれツたいねエ、良人こそエンサカホ

イの大八車でも曳いて人様に迷惑かけない様になささい
 「さア諸君、どうか今日のところは妾に免じて、あれは狂愚で御坐います、現在女房の口から良人を狂愚と申し上げて謝罪を致しますから」いひつよ自身まづ起つて門口の格子戸引き開くれば、四人の壯士やうく、這ふが如くに立出でながら、容貌といひ性質といひ世辭といひ愛嬌といひ面憎いほどの女盛り、畜生、今夜も彼奴が抱いて寝るか今更しみんお鳥を見返りつよ、「いや細君、君は實に感心、感心、貞女だ、えらいもんだ」ホ、、、御戲言を「決して戲言ぢやアない、今日もし君の艶にして且つ美なるが上に彼の戦々競々たる婦徳なくンばさ、無事で済むべき場でなかつたが、いや持つべきものは女房かね、しかし細君、せんたい君は、實に惜しいもんだぜ、恰も珠玉を泥中に埋むるが如しだ」おや、お世辭の宜しいこと、ホ、、、、そんなにお世辭が善過きますと、諸方で御存じのない罪が出来ます

よ』や、こいつ堪らぬ、いよく堪らぬわい、あゝ彼にして此妻ありたア何事だ、悲憤の至極、慷慨の至極、おもはず一種の感にうたれて、いやもう細君、まよならぬ人生の不遇は血涙紛々たりだ、願はくば前途あやかりたいね、君の如き女をさ、かりにも妻として、我輩もはや死すとも悔いすだ』

敵と味方を左右に引き受けてお島が一人の活動、やうく四人の壯士を世辭に丸め浮氣に附け込み愛嬌に巻き落としつゝ、暮れかよる夕陽に脚下よろめく醉漢の影を見送りながら、ほっと一息ついて家に入れば、元來無精の健次も今日は流石にランプの火のみ自己が手に點して、たゞ兩腕ほんやりと物おもふ體なり、

『おや、うって變つて御平靜なこと』『當然よ、及公だつて敵手なしに獨り騒げるもんかね、

時に今日は色々と御骨折だつた、全體彼等ア揃ひも揃つた麻幹の菓立、身も軽けりやア心も空洞の息抜け、一束に曲折つて棄てる分にやア雑作もないが、飯の上の蒼蠅同様うるさいやね、ところを和女が臨機應變の一撃、いや何をさしても失策がねエよ、感心、感服』また始つたよ感心感服が、よしてください』ハ、、、怒ッちやア逆捻ぢを喰ひ、譽めちやア止せとの御叱り、當分まづ黙つて居るが宜いかね』さやうさ、黙つて在らつしやい、別して良人ア口が災禍の基ですから』はいく時に、あの酒は何處から持つて來たのだ』三月あとに移轉の蕎麥を配つた以來、なに一つ近處から義理の返酬をうける覺えもないでせう、また酒樽が大道の中央に顛つても居ませんからね』なるほど、ぢやア買つたのだな、してその錢はよ』餘計な詮議はしなくつても宜いから、今日は早く御寢みなさい、恍けて起きて居られちやア却つて迷惑です』恐縮、恐縮、嗚呼なさない哉、恍けて起きて居たくもねエがさ、

眞面目で考へちやア一日も過されない今の境涯だからね、いや痛み入りました、ほぜくるほど汚穢日の立つ芥塵世帯、萬事は和御前に任すべし『まかされて嬉しすぎますわ』『そこを何卒あまり嬉し過ぎないで、どうか辛抱してくれろよ、ぺこ〜他人に頭を下けたり端た月給を貰って食ふ分にやア仔細も絲瓜もねエが、さて斯う變に曲って生れ出した男一疋の不幸だ、いくら遣り損つても仕損じて、最後の結果を覗つての本心だアね、夏瘦の小兒に飼はれた金魚のやうに米粒ばかりを喰って眼球の飛び出す男と思つて呉れるなよ、遅くて茲まづ三四年、おぬしが三十女の曉にやア、宿志が外れて綱ツ曳の人車よ、うまく當りやア忽ち馬車だ、それとも鐵槌の川流れ、生涯うかぶ瀬も無けりやア赤繩あやまり結ぶ悪因縁、夫婦が手に手を取つて對の伊達衣裳か何かで一番おもしろく心中すべし、添ふに添はれぬ中ちやアなし、添って添ひ遂げ過ぎた夫婦心中なか〜乙だぜ』『えよ、おふざけでないよ、馬鹿らしい、

よくまアそんな戲言が今日の口から出ますことね、呆れて物が言はれないわ』で御坐らう、和女なればこそ呆れながらも世話してくれるのさ、これが平凡の女で見ろ』澤山々々、もう澤山、寢言なら夢でも見て腹さ〜お呻り遊ばせだ、さア〜寢ることよ、寢てください、黙って宵寢も身の藥ですから』

大俗の眞中に飛び出しては成敗ともに一筋繩にかよらぬ男も、妻がためには小兒の如く扱はれて夜著の中に押し込まれたるまよ、バチ〜眼のみ働かして思はずお島の下著に心付きぬ、『ほい忘れた、睡眠の前の定則、いざ便所へ罷り立たうか』いひつゝ起つて廁に行き戻りがけ、其處に脱ぎ捨てたる自己が羽織を取つて思案抛首のお島が背後よりフハリと掛けたるまよ、また忽ち夜著の中に藻潛り込んでの本音一聲、『風でも引いてくれるな、よ、身が大事だ』

上野の宵の鐘より曉の鐘まで、つくぐと枕に通ふ一夜まじりともせず、過ぎ越し方、行末のこと取交せて身一個に物おもふお島の風情、をりくほつと思はず漏らす溜息を、狸寝入で聞く身の健次なほさら辛し、

臥房をぬつと起き出づれば家内一時に騒ぎたちて、はや玄關には馬車の用意、廊下づたひの湯殿には加減上々、マニラの葉巻か埃及煙草を燻しながら、やがて座につけば牛乳一合スープ一合、半熟の卵に焼鹽添へて三四個、十六七まるほちや文金島田の小間使に運ばせて、たゞ一目みたばかり、今朝は止さう、喰ふ氣がないと願もて追ひ退くべき筈の目算がらり外れし今の借屋住居に、悲しや菜ツ葉じこみの味噌汁さへも添ふや添はずの番茶冷飯、宵買ひの澤庵漬を噛み占めて、おもはず倚り掛る長火鉢に噓一つの灰神樂、お島は猶更ら肌うすき辛氣辛苦を朝風に弄られてや、そつと襦袢の袖に鼻を蔽うての額越し、良人を見上ぐる眼許千

兩せめて一圓紙幣に賣りたや賣りたや、いよいよと出て來よう、これから何處へです何處ツて別段これといふ的もないが、まア足の御勝手次第ぶらぶらこつき歩いて宜い運の玉でも見付けるのさ、あら、もう恍けて在らつしやるよ、いくら歩いたつて人間の運が落ちて居ますものか、とところが、をりくおつこちてるよ、過日も淺草の並木を通るとね、乃公の背後にブーンといふ音がするから驚いて振り返つた時、すでに遅し遅しだ、三年たしかに太平樂を唄ふに足るべき大運の玉奴が和女、矢の如き勢ひで雷門の方へ飛んでゆくよ、畜生、誰か中店あたりで拾つた奴があるに違ひない、だから人は油斷をするもんぢやアねえさ、いつ何時どんな福の神に出喰はずかも知れないからなア、いつ何時どんな災難に出喰はずかも知れないって用心する人はあるが、馬鹿らしい、福の神、鼻拭紙が聞いて呆れますわ、そりや良人、吉原通ひの人車の掛聲に驚かされたのでせう、いやさうでない、なんだか乃公の目に

黄金の塊物が飛んだやうに思つたぜ』痾の故の塊物でなくて僥倖さ、ホ、ホ、ホ、ホ、あゝ斯くぞ落ち果てよは男も末、口惜しや連れ添ふ自己が妻にまで見下されにけりかね、ハ、ハ、ハ、ハ、いくら見下されても見上げられても、和女あればこそその乃公だよ、互に欺され欺されて友白髪まで添ふが浮世の習慣、虚偽から出た眞實も宜いが眞實から出た虚偽もまた洒落れてるぜ、どうせ斯うなりや前の世のだ、今更ら逃けてくれるなよ、この上に黒田健次お島におん出られて狂氣となる、なんかいふ小説でも作る奴があると堪らないさ、とかく自由ならぬが世の常、今すこしの間だ、しかし斯んな場合に和女が子でも生んだら、全體どうなるだらう』さやうさ、定めて立派な父様が出来ませうよ』これさ、然う冷淡にいふモンでないよ、なんとか心配らしい顔をして、おもはず腹部を擦るの體よろしくと遣つてくれるよ』えよもう、知りません、出るなら早く出て下さい、例の運の玉が飛んで仕舞ひますよ』恐れ入った、

さくらば出るべし

良人が立出づる背後より羽織を打掛けながら、出るにも入るにも此羽織一枚、巢守の妻の我身は譬ひ小夜の寢覺めの衣手うすくとも、この寒天に門外を立つる男の身、せめて著替の一襲きせて出したや、嘸や肩身の狭からむと、お島おもはず涙ぐめば、饒舌の健次も無言の體、やうく門の格子戸あくる時『いつてくるよ』

昔ならば尾羽うち枯せし浪人姿、五分月代の大髻の凄味を帯びて、申刻さがりに近けれど黒羽二重の五所紋、朱鞘の大小おとしざし、やゝ煤ほりし白博多の駄上帯に垢じみたる糾緒の雪駄、わざと人目を忍ぶ編笠ぬいで鬮絲に引ッ掛けながら、萬事ぎろく眼の一文字口、眞向額の太刀疵二つ三つあらば猶更、四方を睨んで怒れる兩肩のそりくと歩みいだすべき筈

ながら、今こゝに落ちてても敗れても野心勃勃たる當世男の黒田健次、中折の茶帽子に二年越しの芥塵をうけて、剃刀の痕に遠ざかりし無精髭むしやく、火口を摺り込んだる如く魚子地の三所紋ほんやりと春の夜の臘月に黒雲がたの襟元くづれし綿入羽織、大島紬も名のみの上著に妻が袷を仕立直せし最後の絲織、爪先どうやら薄けの紺足袋に鼻緒のゆるみし駒下駄はきしめて、此奴かくても僭上の葉巻ほかく、懐手のまよ、ことしの花も覺束なき櫻木町の徒住居ぶらりと立出でぬ、

立出づればとて世は狭し風は寒し懐中は冷し身は果敢なし、けふの天氣に迷ふ寒鷲の寒ざらし、いづこを的といふでもなく誰を問ひ訪るよでもなき、羽色の褪めし翼を伸して、まづ裏阪を上りつゝ上野の山を歩みながら、そこなる共同椅子に無心の腰うちかけぬ、
みれば我より先に腰うちかけたる三人の男、一人は親兄弟を欺しぬいたる喰ひ詰め書生の

體、一人は草の山縁の請人に突き放されし風來物、一人は半被を纏ひし職人根性の髯腐れ、いづれも血の氣の失せし顔色憔悴形容枯槁しながら、どうせ幾度か池畔に彷徨ひし身も心も草臥れの果、つい眼前の不忍の池に飛び込んで鯰鱈の腹を肥さむ勇もなく、なほ土の上に生在らへて百圓紙幣の一枚も拾ひたけなる夢うつゝの體を、健次じろく見渡して、や、面白いぞ、徳は果して孤ならずや、『時に諸君、貴公方は全體こゝに何をして居らるゝね、前夜の花柳の一刻千金を所謂あの妓に喰ひ付かれた今朝の疲勞でもあるまいし、ちよいと出難い情婦を待ち合はす場所とも心得ずさ、乃至また後朝の別れを惜しみ過ぎて細君の手前いさよか宿へ歸り損ねた意氣な筋とも見えないがね、ハ、ハ、ハ、矢張り僕輩と一般、餌に放れた旅鴉の時ですか、随分おもしろくない空ですなア』いづこの里にも持つて生れし法螺の貝は吹き止まず、誰彼なしに人の面みかけては其まよ置かぬ難物の健次、そろくこゝ

に例の悠々寛々を極め込んで毒口を吐き掛れば、三人の瘦男おもはず顔を見合はして呆れたる風情、

「諸君、まさか揃って無言の行でもあるまい、なんとか言ひ給へな、袖ふりあふも他生の縁、蹟く石も縁の端だア、ねエ諸君、かうして同じ錢いらすの据ゑ付け椅子に蒼ざめた瘦ツ面を竝べるのも何かの約束さ、や、そこなる書生先生、前途なほ遙なる俊秀の風采を備へながら一朝あやまり到る不幸の今日かな、幾歳にならるよ、おい職人君、可憐いなせな俠骨を今その風姿にしたなア誰だ、語って聞かせろ、やい職人、時に風體の分らないなア御前さんだ、かう見たところ田舎から出て、まだ丸一年たア経つまい、どうだ」

七年連れ添ふ自己が女房にさへ、をりくく呆れて狂氣といはるよほどの健次、まして長の旅路の汽車中で煙草の火でも借り合うての上ならば知らぬ事、往來も同様なる上野の山の共同

椅子に忽然として現れながら、そこに居並ぶ無縁の他人を捉へて十年も馴染み抜いたる如き駄洒落の数々、一言でも敵手の言葉に申分あらば決闘も仕かねまじき横筋違の勢ひに、南無三寶といつ聊か氣が變だと見て取られ、いつのほどにか置去にせられて唯ひとり惘然の體、されど本人さらに惘然たらざる例の横著心、面よりも先づ臍の邊りに苦笑を含んで四邊ぎろく見渡しながら、とかく浮世は斯うしたもの、なまじひ會釋して義理を立て腰を折ればこそ、誰が所有とも定めぬ天下通有の共同椅子でも先客様の権利に後入の禮とやら、吹けば飛びさうなる奴どもが明りに占領して乃公ほどの男も幅の利かざるところを、づうくしく出掛けて慰み半分、敵手に取って隙間もなく無用の毒口吹ツかくれば、忽ち狂氣の鑑定に暫しも居堪らず、いつのほどにか立去つたる後乃公の獨占め、思はず面をあけて一息ふんと獅子ツ鼻で笑へば、をりしも不忍の池の面を嘗めて暮れかよる

最後の黒田健次

夕陽の風に、枯れ残る木葉一枚はらくくと落ちぬ、これをも此奴おのが鼻息で大木を動かしたと云ひ兼ねまじきところなれど、あやにく身邊に人影なければ聊か間の抜けたる調子、袂よりマツチを取出して消え果てし葉巻の煙草ふき出しつゝ、思へば儲きのふけふの境涯、どうして此後の浮世を渡つてくれうか、

好いた女を連れて世を忍ぶ借屋住居に貧乏世帯の洒落風流も、いはど人生なほ遙なる二十歳前後のこと、百計つき萬策やぶれて俊秀いたづらに草に泣くの落魄を奇とするも、およそ人間まづ三十前後のこと、往いて返らぬ水の流れ、去つて戻らぬ生命の刻み際に、いつまでか其日々々の風次第に任すべき、おのれやれ、横町の犬でも餌を涉つて渡る世に、五尺ゆたかの男と生れたる我、一日わづか七合の米さへあらば過すに易き人の身を、七年連れ添ふ可愛の妻に苦勞さすとは無念心外、運さへ叶はど迷ひ猫さへ拾はれて美人の膝に眠る世界を、白

癡でもなき我こゝに四肢五官の活動を間違ひて、青天井の木の根に腰うちかけての迷惘とは、あはれ何時のほどにか占めたる腹帯ゆるみにけりと、肩を怒らし眼を腫り拳を握つて立上れども、俄に脚下より大地めきくと罅割れて金庫の湧き出づることもなければ、やはり元のまよなる黒田健次、今夜の宿に歸つて妻を對手に膳の上の一盃ありやなしや、年が年中とほけぬいたる變物も自己ひとり本氣の沙汰、茂れる樹木はや薄闇を帯びて見あぐる空に宵の明星きらめきつゝ、枯れたる梢の埒に後れし鴉の聲かなしく、樹間々々の人影去つて池の面より脚下を吹き上ぐる風さむく腸に沁めば、流石に平生の駄洒落も法螺も呻り出さむ勇を失うて、やうく歩みいだす目的は何處、

上野の山の共同椅子に無用の半日を費して、人は家路に鳥は埒に夕暮の薄闇ほつと脚下に迫

りながらも、歸ッて佳肴珍味のある身でもなく、また細君に喜ばるゝ身でもなければ、どうせ腹の減りついでに爪先の向ふところを今夜の十二時まで、歩いてくゞ歩きぬいたる草臥の一睡、せめて錢入らずの極樂ぞと、其まゝ山を降りて何處を的と定めなく廣小路ぶらぐゞ、まづ手近き神田の小川町へ出で久しく見ざる夜の書生の景氣を窺ひ、かたぐゞ古本屋の店頭を冷して暫し大道讀書の快を求めくれむと、和泉橋を渡るの足取やうくゞ和泉町の裏通りに差かよるころ、とある小家の内より御高祖頭巾に吾妻コートあづまの年若き女姿が、宵闇の出合がしらに突き當ッて、はッと驚き遁け入るかと思ひの外、御免くださいまじと小聲の挨拶そこくゞ小走りに馳せ行くを見送れば、四五間先の辻に眞黒なる外套姿で待ち受けたる一人の男に倚り添うて、びつくらしましたよ、いま家の前で變な人に突ッかよられてさ、なんでせう彼奴は、墓口でも取られやアしないかと帶の間を探る様子に、さすがの健次あきれて此方に足止めながら、闇に透して畜生奴、ふさげた眞剣をするのみか、苟も天下の奇傑たる我を巾著切とは、

もし女郎一疋ならば白粉くさい襟首ひツとらへて一ねぢり泣かしてくれむもの、もし野郎のみならば猶更ら面白し向脛を蹴飛ばして蹂躪るべきところなれど、みれば互に年若き男と女、しかも人目しのんで何處へやら往せる様子、岡焼めいて騒がすも罪なり、我も七年以前は今のお鳥と共に數々おほえのあること、されど巾著切とは畜生、ひどい奴かな、あまりの小癩に觸ッた立腹まぎれに、今は小川町に向はむ心も失せ、えまよのかは、此ところ不器量ながら踵を返して歸るに如かずだ、破れても巢枯れても借り切ッた我家、テクテク歩いて夜露にうたるよよりは優れり、連れ添ふ女房のお鳥いかに怒ればとて恨めばとて、まさか良人の我を巾著切とは言ふまじ、それよく、菜ッ葉も献上綱も咽喉三寸、氷りし冷飯

も番茶を煮立て搔ッ込めば、腹の皮が張ッて眼の皮たるむを相圖に、寢た間の夢は王侯貴人も我も同じこと、明日はまた明日の雨風どうなるものか、さらばいざ罷り歸らむと舌鼓うちながら、ほつく上野の方へ引ッ返せし今夜の健次いさよか哀れなり、上野の山の間道は近けれど、此うへ木根に躓いて向脛を指り破るも氣の利かざる業、さらば籠をめぐりて阪本通りに出でむと、はや夜の十時を過ぎしころ、ところがらとて建ち並ぶ小家の数々いづれも戸を閉て、路傍に寒氣を凌ぐ辻車の股の間より破れ提灯のほのめく影に、我を怪しむ犬の聲三四疋、遠吠に吠え立つるも小癩なり、

心に喜悅ある時は路傍の小石も我に對うて媚ふるが如く語るが如く、心に憂患ある時は無情の草木も我に對うて嘲るが如く笑ふが如く、身の窮達利害に連れて浮世の苦樂さまざまある

中に、わけて夜更け人定まりて後、おのれ獨りの空腹かへて横町の犬に吠えらるよほど淋しきものはなし、

さればこよに元來うまれつきたる横膽張りの黒田健次も、青天白日の下に我から駄洒落れて他人に對へばこそ、指頭で天地を顛倒して一呑みにするほどの法螺も吹け、一日半夜なの的なき雙脛を動かしぬいて、草臥れ果てし夜更に寒氣を凌ぐ鍋焼うどん一碗の懷中もなく、いざ無事に歸ればとて家には冷飯かつこんで煎餅蒲團に果敢なき夢を結ぶの外、明けなばまた明日の浮世に心を悩ます今の境涯、たゞ連れ添ふ妻のお島が女ながらも幸ひの意地骨いささか張り切ッて、しかも天縁ふしぎや我に劣らぬ恍惚さ加減が却ッて貞女の基、猶更むかしに彌増す今日このごろの苦勞さんぐを、いつまで惘然うけて男一貫いづこに立つべきや、さらば奮脚一番あはれ地獄の上の一足飛び、どうでも遣ッて退けずばなるまじと、おもはず

歩をとどめてステツキ持つ手に力を籠むる折しも、横町より不意に駈け来る人車の馳勢、は
ツと驚いて身を轉す隙間もなく健次が腰骨に轆棒を突ツかけぬ、

さらぬも飢ゑたる虎の如く獲物あらば千尋の絶壁をも躍り越えむとする此ごろの健次、まし
てや宵には和泉町の裏通りで乳臭き女郎に突き當てられて巾著切と間違はれ、武者くしや紛
れの夜更けし今ことに草臥れ果てし腰骨を人車の轆棒に突ツかけられたる健次、なんとして
其まゝの無事に済ますべき、顛ばむとする身を翻して猿臂を伸ばすや否、その轆棒ぐツと
引ッ擱ンで片手のステツキわざと背後に、憤怨あまつて溢れる中音するどく、「やい待て、畜
生、やいぐ、待てといふに」

夜は深し四邊に人はなし、まよよ他人の足の一本半本引ッ切ればとて、此方の兩脚さへ無事な
らば其まゝ逃けて駈け出すべき勢ひの轆棒を、逃しもやらす忽然ぐツと擱ンで文句を並べむ

とする奴、とても弱身を見せては猶更ら叫はじとや、車夫も劣らぬ憤怒の大聲、ただ、
畜生たア何だ、馬車ちやアあるめエし、牛車ちやあんめエし、曳手は人間だよ、おい眼をあ
いて見ろ、夜路のそくくうろつく奴に怪我させねエための提灯だぜ、この提灯が見えねエの
か」

健次きくや否や片手の轆棒いよく固く擱ンで片手のステツキに車上の前掛を跳ね退けなが
ら、「おい車夫、汝のためにやア大事の客だらうから、まアその客を卸せ、怪我でもさすと面
倒だ、サア客人おりなさい」ヘン辻車の拾ひ客ちやアねエ、ある高等官の御抱へ車夫だ、落
魄書生奴あまり増長すると爲にならねエぞ『なに高等官の御抱へ車夫だ、いやに時代おくれ
な名乗をあける奴だな、ちやア主従ぐるみ遣るから覺悟しろ』
つい蟲の居どころ悪かつたとは世の人のいふことなれど、元來うまれて年が年中いつとても

蟲の居どころ善からぬ上に、わけて今宵は武者くしや腹の立上つたる健次、人車の轆棒ひつ掴んで怒れる面上に朱を濺ぎつゝ、あはや片手のステッキ闇を鳴らして閃かむとする刹那に、

『黒田までッ』叫びしは帽子まぶかに外套の襟を立てし車上の聲、『おい黒田』

不意に我名を呼ばれたる健次、閃かむとするステッキ其まゝ靜に下せども、片手に掴む轆棒の力さらに放ちもやらず、『誰だ、今まで無言で在ながらステッキの飛び際に黒田、誰だ、乃公を黒田といふなア』驚く車夫の提灯に透して見上ぐれども、帽子と外套の襟に目ばかりの男、なほ依然として、『おい黒田』

たゞ黒田々々といふ聲に健次も思はず掴める轆棒を放ちて此方に立てば、やうく車上より悠然として降りし男、『ハ、ハ、ハ、ハ、黒田、相變らず壯だな、おいその提灯を借せ、そら乃公だよ』外套の立襟を外し帽子を取つて突き出す面上を見れば、南無三寶、夢なれや夢なれや

絶えて久しき今は昔の苦樂を誓ひし五人男、その中の一人倉橋幸藏なりける。『や、や、や、や、倉橋』

『さうよ、倉橋幸藏だ、しかし妙な所で變な出喰はしやうだなア』

おもへば八年以前、隅田川邊の汐入村に滔々たる天下の平凡書生を嘲つて犬小屋めいたる茅屋を構へ、奇縁ふしぎに寄り集りし五人の貧生、これを古風にいほど生を同じうせずといへども死は俱にせむとまで盟ひし中に、唯ひとり曲つて飛び出したる其後の健次、よしや如何なる事ありとも今こゝで我に出逢ひし驚喜のあまり、むかしの彼奴に似氣なきほどの優しき振舞あらむかと思ひの外、相も變らぬ横車の一癖物、そのまゝ無言に踵を返して立去らむとする勢ひに、倉橋幸藏あわてよ二三歩追ひ行きながら、『おい黒田、まで、待てといふに黒田、どこへ行くのだ』

いよく變物の健次、わざと三四間あなたの闇に立ちて振り返りもせず、『倉橋、今夜の乃公

を黒田と思ツてくれるな、みづから身の落魄を愧ぢてにあらす、また君の人車を押へて亂暴めいたが故にあらす、たゞ昔より知らるゝ通り斯の如く生れて斯の如き黒田健次、願はくば前途なほ数年の間、君等の腦中に健次あるを忘れてくれだ、幸ひ君の健康を見て外の四人の消息きかすとも安心だ、ますく進んで初志に反かざらむを祈ると共に、よろしく傳言してくれ、健次いまだ死せずと例の君としては、なるほど、しかし黒田、妙に固すぎるぢやアないか、三日相語りし人も年を経て逢へば三年の語り草だ、まア宜いから僕の家まで、どうだな『いや、ゆくまい、三日相語ツて三年の談を喜ぶは腸を彩る奴のこツた、十年の舊友知己いまだ語るの時を得ずして路上に殆ど他人の如きも人生また快だ、それとも倉橋、君が美人でもあればさ、ハ、ハ、ハ、また逢はう』

かつて刎頸を契りし舊友こゝに別れて三年の後、おもはぬ途中に逢うて加へも一人は昔を今の語草なる紳士の體、一人は舊に依つて蓬髮弊衣の落魄生、さらば俄に腰を折つて哀を乞はずとも、黒田健次まづ言葉を柔けて喜び對ふべきが浮世の常なるを、此奴どこまでも横筋達強ねたる男とて、逆まに入らざる無用の惡まれ口を叩きつゝ其まゝ立去らむとする勢ひに、此方の倉橋幸藏うまれて人に過ぎたる慇懃溫雅の性、さながら落魄れたる主に對うて舊恩を謝するが如く、袖を曳き手を取らむばかりに慰め乞うて、やうく中根岸なる自己が住居に伴ひ歸りぬ、

二人の背後に空車ひきつゝ從ひし車夫、まづ走せ抜けて門前より張り上ぐる御歸宅の聲に、夜は更けたれど家人いづれも立關に迎へいづる體を、健次じろく見渡して軽く主人の肩を叩きながら、『おい倉橋、止せよ、ふざけた真似をさすぢやアないか、まるで緞張芝居の殿様

だ、あゝ惜しむべし君もまた凡人に毛の生えた男になつたなう』おのれは凡人に微の生えた
る身を持ちながら、また例に依つて横道の毒舌こよに一番、

されど主人の倉橋たゞ微笑を帯びたるのみ、奥まりたる書齋に伴うて互に座を定めつよ、舊
友めでたく邂逅の祝盃は先づ後のこと、さしあたりて問ひたきは健次が今の境涯、かきたつ
るランプの光りに改めて其顔じつと見詰めぬ、

『黒田、今は何處に』なアに、ついこの近處さ、しばし浮世を忍ぶが岡の片邊り、やがて花
咲く春の櫻木町、といふべきところだがね、昨今しのぶ甲斐もなくつて債鬼しきりに門に責
め寄するの體、この様子ぢやア、どうやら春が來ても花が咲きさうでないよ、ハ、ハ、ハ、ハ、
だが倉橋、今が健次に取つて尤も腦を活動さすべき面白い時だよ』ぢやア何だね、目下あま
り充分といふ境遇でもないな』無論、目下は大に不充分さ』ところで、あの女は、曾て君が

ために敬愛すべき女は、其後どうしたな』合てにあらす今なほ日夜敬愛すべき女、それが其
後どうしたとは酷な問だね、およそ世に健次あらむかぎりには彼また在りさ』いや、恐縮、流
石は君の御鑒定だつたね』ハ、ハ、ハ、ハ、此方の鑒定が利きすぎて彼女のためにやアとんだ不
幸さ、僕のやうな風來物に添はずとも、ころは十八九の彼女が全盛時代、随分玉の輿へも乗
ツけに來た筈だが、あゝ縁なるかなだ、それとも僕に、ピツか唐變木の知らない善いところ
があるかね、自分ながら不思議だよ』おい／＼自惚ちやア困る、駿馬癡漢を乗せて走るとい
ふこともあるからね、ハ、ハ、ハ、ハ、これは失敬』
さても其後さるほどに別後の仔細、なほ聞きたきこともあり、また言ひたきこともあり、今
宵は夜と共に語らむと、主人の倉橋幸藏しきりに手を執つて止むれども、例に依つて我まよ
の健次は例に依つての氣隨者、いや芳志は謝するに餘りあれども、多年の貧苦に伴うて寒夜空

聞に我を待つ細君あり、乞ふ他日に譲らむと、其座に持ち出したる主人が心づくしの酒肴に箸もつけず、そのまゝに打棄てて歸るかと思へば、此奴さらに平然として會釋もなく手を鳴らしつゝ、自己が召使ひの如くに下女を呼び立てて臺所より二三個の折を持ち來らしめ、座に出でたる主客の珍味を悉く詰め込んで引ッ提げながら、引ッ提げ難き酒のみは銚子二本ぐツと飲み乾して、『はい、さやうなら』

ぶらりと倉橋の家を立出でしころは、はや夜の一時を過ぎて天地も眠れる中に、大俗の健次たゞ一人、手もつけざる二人前の折詰と借提灯をステツキの先に吊しつゝ、いざ立際の瀧呑みに微酔きけんの獨言、みづから呟いて自ら得意然たり、『や、世の中は妙だわい、半日半夜なんの的もなく空腹かゝへてコツキ歩いた瀧瀧玉の眞最中、元來の過誤を過誤ともいはせず忽ち車の轆棒ひツ擱んで、此方から吹き掛けた喧嘩の本尊が、よもや三年あとに別れた倉橋

おの野郎とは思はなかつた、しかし彼奴が自用车の高幅で、乃公が昔のまゝの膝栗毛に布子一點の寒ざらし、いさゝか面白くない出合頭を、わざと一番ぐツと拗ねて見せたところが、案に違はず果して今もなほ人の善い奴だわい、聞けば高等官で年俸の二千五百圓とか、さらば當分まづ小遣にありついたも同然、いや妙々』

叩けば破れ踏めば碎かるべき借屋住居の門の戸一枚を隔てゝ内と外、しかも夜は更けたり夫婦が互の聲は手に取る如し、

『おい今歸ツたよ、ちよいと開けてくれ、おい』どなたで御坐います、今時分おい〜と仰しやるのは、『ふざけるな馬鹿、乃公だよ、いくら寝惚けたって良人の聲を聞き忘れる女があるものか、寢音でも知れたもんだ』寢ほけては居りませんが待ちほけて居りますよ、ま

た良人の御聲躰音どころか一町先の匂ひでも存じて居りますよ、しかし良人、今時分まで何處をコツキ歩いて在らしつたの、あかい宵から野牛の病うたやうに、もうか、もうかと思つて、わたしや、まだ夕飯も喫べませんよ、ちやうど一時半『これさ、いくらでも腹さ〜文句は後で聞くから、兎も角、内へ入れてくれる、寒くツて堪らないや、後生お願だ、きつと以來は心得ますだ、ハ、ハ、ハ、ハ、』なにが呵しう御坐いますの、いやに御機嫌だこと『これは甚だ失敬、いや今のは苦しませの泣き笑ひで御坐る、勿體ない、ナンとして呵し笑ひの出るべきや、かくまで貞節の和女に對して、ハ、おツと南無三、また苦笑ひだ』

やう〜家内に引き入れられたる健次、倉橋の家を立際の瀧呑みに聊か酔を帯びて、さけたる折詰の中は無事なれど外皮は碎けて引曲りぬ、『や、おそくなつて濟まない、實ア思ひもよらぬ舊友に出喰はしての、兎に角、これを、かはいさうに腹が減つたらう、堪忍しろ、よ、

萬事〜さ世た〜はい、ありがたう、しかし、あす一所にいたときませう、どうせお腹の減りついでだから『さういはずに喰へよ、つつつき荒した折詰ぢやアないから、それとも面倒なら及公が膳立をしてやらう、和女は其處に其まよ、じつとしてろ、ね、いざや天下の奇男兒みづから起つて庖厨の技に取掛らうかい、ハ、ハ、ハ、ハ、』あれ、およしなさいよ、そんな事を良人に仕ていたごとくと却つて迷惑ですから『なアに和女、稀にやア宜いよ、平生さん〜無理をいッた罪亡しに』ホ、ハ、ハ、ハ、さうぢやないの、折角していただいても、あとの始末に却つて困るからですよ『こいつア酷い、かくまで及公は困難者かね、七年連れ添ふ女房の和女でさへ其口上、まして無縁の他人は、嗚や嗚』おや、おや〜、今はじめて氣がついたのでですか『いよく〜酷い、ます〜形勢おだやかならずだ、さらば御免を蒙つて寝るとしべい』寝るツて良人、夜具はありませんよ』えッ、どうしたのだ』賣ツちまいました、こ

よに妾が引ッ掛けてる袖夜著一枚『やれく、なぜまた夜具なんかを賣ッたのだよ、この寒いに『夜具がなくなッて良人こまりますか』こまらないでさ、夏ちやアあるまいし』しかし寒いくらゐるは生命に別條ないでせう、だから賣りましたの、お飯がなくなッちやア死にますよ』
『いやもう一言なし、さらに言句なし、えまよのかは夫婦二人で抱き合ッて夜を明かさうよ、あけたら幸ひの一工夫、けふ逢ッた舊友を押へるさ、ねエ、お鳥『馬鹿々々しい、いくら寒いからッて抱き合ッたまよ朝まで寢ずに居られますものか、まアこの袖夜著をあけますから妾の膝を枕に引ッくるまッてお寢みなさい、わたしや朝まで此まよ、なアに火鉢に火さへありやア、たしかです』

春とは名のみ一月中旬の大寒しかも夜の二時、固より落ち果てし借屋住居の貧乏世帯に、寢酒一盃の我を待てべき覺えなければ、せめての夢を夜具に包んで朝まで浮世を忘れむと思ひし其夜具をさへ、もはや賣り飛ばして残る煎餅蒲團一枚を夫婦が今の錦、『寒いくらゐるは生命に別條ないでせう、だから賣りましたの、お飯がなくなッちやア死にますよ』と眞正面より打ち込んたるお鳥が怨めしけの一言に、奇言百出ならば無心の銅像をも吹き飛ばさむばかりの健次ぐツと押し詰ッて唾も吐き得ず、たゞ眼を白黒にして兩腕くみつと無心の體、
『ねエ良人、今夜かぎりで貧乏神が出て行くぢやアなし、これから長い浮世に全體どうなさいますの』なるほど、少々こまるな』なるほどッて今更ら感心しても所詮おツつきませんよ、また少々どころの困り方では濟みませんよ』道理、道理『道理は當然ですよ』しかしお鳥、先刻いッた通り、今夜ふいと珍らしい舊友に逢ッてね、しかも其奴が聊が人間めいて暮す様子だから、夜があけ次第すぐ押し掛けて、とツちめるさ』もし其人が、聽いてくれない時は』

『なアに聴くさ、聴かせるさ、萬々一ぐづくいやア、大喝一聲ぶんなぐるさ』あれ、また十八番だよ十八番でも十九番でも、かうなりやア破れかぶれ、乃公の眼に見付かつた奴が災難だね』口にはいへど心は聊か何とやら、またもや兩腕くんで思案の體を、お鳥じろりと見ながら片頬に笑を含んで、無言に衣具を引き出しつと靜に展べて打臥しぬ、しかも袖夜著の襟を額際まで、

おもはず振り返る健次、『おや、衣具があるぢやアないか、おい、おい、はア今夜は乃公に強意見の體だツたな、おい、なんとか言へよ』もう寢ました』寢た女が口をきくかい、しかし無理はないさ、ねエ、和女にばかり苦勞をかけて本尊の乃公が斯の通り、いや、わかつたよ、よし／＼わかつたよ』何が分りましたか』わからないで何うするものか、分ることア固より分つて居たが、つい、ヤツぱり少々わからないから』なんだか良人の言ふことア丸で分

りませんよ』しかたがない、當分まア分らないとしておくさ、時に御免を蒙つて端の方へ、もぐり込んでも宜いかね、いやに寒威が徹へて來たから』どうですか、良人の胸裡に御相談なすつて其上のこと』これさ、じらすない、乃公の胸に問やア無論すぐ這ひ込めと言ふに違ひないが、夫婦かくても別あり、まづ和女の許可を得てからさ、かはいさうに、此頃は随分よわい音を吐くやうになつたぜ、あゝ貧は諸道の妨害だ、我ながら身の瘦を覺えて來たわい』

『それが何より良人の名藥』

身はたどれ骨は碎けて粉になるとも、持つて生れし横車の根性と吹き出す例の駄法螺は所詮やむまじき男ながら、七年ごしの憂に伴ふ女房が貧苦を楯に涙まじりの強意見、さすがの健次も腸に徹へて身一個の置き所もなく、夜一夜そのまよの枕頭に坐して一期の思案この時

との顔色を、お島も知らず顔して寝ながらの額越しに見上ぐれば、吊ランプの油さへありやなしやの薄闇き火影に、平生の横著面なんとやら失せて哀れなり、

枕頭に兩腕くんで黙然たる良人が心と、我身のみ夜著うちかぶりて額越し、をりく目^めに偷^{たう}み見る妻が心と、世に落ち果てし貧乏借屋の曉^{あけ}かけて互に言はず語らぬうちに、はや旭は戸の隙間より夫婦を嘲るが如くに差入りぬ、

をりしも表の戸を叩く音『おい黒田、まだ起きないかね、おい、黒田、もう八時だぜ』ハハ、ハ、ハ、と笑ふ聲は正しく倉橋幸藏、前夜の今朝はや訪ひ來しが南無三寶、貧は心に恥かしからねど連れ添ふ妻の不機嫌は身に取って今の禁物、よしや隔心なき舊友なりとも知られては男の瑕瑾、なんとしてくれむ、まて、しばし、

お島が寢姿じろりと見下しながら、やうく起ってランプの火を打消し、わざと表の戸は其

まよに半意の竹格子より破れ障子ひきあけつよ、ヤア倉橋、相變らず早いな、前夜は思ひがけない馳走だつた、あの馳走を無事に持ち歸つて久しぶりに細君を慰め、いはゆる四寸づよの一酌に斯くの朝寢坊よ、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし何處へ『なアに前夜、少々聞き残した事があるから、わざく君の家へたづねて來たのさ』そいつア恐縮だが、まだこの通り家内は眞闇で寢衣のまよだから、しばらく其處に待つて居給へ、しのぶが岡の森影に昔の友をたづねて朝露なんとやら身に染む工合なんざア随分風流だぜ、しかも其友はまだ起きやらず、半窓の竹格子を隔てゝ物語るに至つては、通の通なるものだね、ハ、ハ、ハ、ハ、『おい、餘計な口をきかすと早く戸をあけてくれ、これが春か夏なら宜いが、冬の朝風が身に染んぢやア風を引くよ、しかも大寒の氷柱おろしだぜ』いや失敬々々、なるほど然うだ、ぢやア直ぐ今あけよう』いひとつと面を引ツ込みしかば、忽ち表の戸に手をかくるかと思ひの外、なんとや

しけむ、待てども待てども音なければ、倉橋またもや頻りに戸を叩きぬ、「おい／＼どうした、開けなきやアまた來るとしよう」聲に應じて再び半窓より健次の面、「やア待遠で氣の毒だが、今すこし待ってくれ、そらマッチをやるから煙草でも吹かして居るさ、ねエ、時に煙草は何を吸ッてるね、今の君の身分ちやア、まさか阿米利加煙草の臭いのもあるまい、マニラか埃及か何だ、ついでに二三本くれないか」

不貞寢といふもの女の身に取ッて第一の禁物、しかも連れ添うて以來ことに七年、いかなる貧苦に逢ふとも我から心を腐らして旭に向ふ寢顔を良人に見せしことなきお島も、あまりの腹立たしき口惜しさに今日といふ今日は、一日このまゝ寢通して貧乏世帯に世話女房のなき不自由さを思ひ知らせむと、夜著ひツかついで無言に死せるが如き折しも、誰やらむ頻りに

門口の戸を叩いて訪ひ來し様子に困り果てたる良人の氣配、さりとて我身を起しも得やらず、半窓の竹格子を隔てゝ苦しまぎれの駄洒落を吐きつゝ、しばしなりとも時刻をうつさむ計畧の哀れさに、お島も今は堪らず跳ね起きて俄に夜具をたゞみ四邊を取片付くれば、健次やう／＼安心の體に門口の戸を引き開けて、「やア倉橋さんざ待たして氣の毒だッたな、なアに妻の女が前夜から少々加減が悪くツてよ、さアすつと、随分廣いからまごつくぜ」

お島そのまゝ臺所に逃げ込めど、引き閉つる間の障子も破れて見透さるゝ今の世帯を、良人の健次さらに恥かし氣もなく傲然として、幸ひ前夜より火の氣の絶えざる長火鉢これを何よりの馳走に突き出しつゝ、「おい倉橋どうだ、粹な住居だらう、歪める荒削りの柱に大道の古道具屋より取合せたる急作の戸障子ぎちばた、張板の浪をうつ天井の煤ほりかへる鹽梅から坊主髯の年を経て鬚髯茫茫たる工合、乃至また猫の額の臺所に隣れる髯づまりの雪隠、門口

の崗に躓けば裏口の戸で頭を打つべき此茅屋にさ、乃公かくの加く蟠ッて閑に俗界の形勢を按ずるところ、なか／＼奇だらう、おもしろいぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、』
吹き立つる駄法螺の貝殻この場に及んでも止まぬ健次の面と、おもひの外の貧乏世帯とを見較べながら倉橋幸藏あきれて苦笑ひしつと、『いや、君にして始めて其意氣軒昂ありだ、しかし細君に、ちよいと御目にかよりたいね、君よりやア少し細君に話したい事があるから』乃公を差措いて女房に談話たア何だ、妙に呵しな深切ごかしを遣ッてくれるな頼むよ、亭主野郎いさよか不首尾の折だからね、おい島、前夜そら、不意に逢ッた舊友の倉橋だ、出て挨拶しろ、なアに其まよで宜いさ、宜くなくツても其衣一枚よりないぢやアないか、あゝ氣の毒だと言ッて縮緬の一襲も拵へてくれる筈の倉橋だよ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

舊友おもはぬ途中に相逢うて其地位を異にするれば得意の者みだりに鼻を高く失意の者いたづらに腰を低めて、互の感情ますます／＼ことに隔つべきが世間の常なれど、うまれて人に過ぎたる温厚篤實の倉橋幸藏いと昔を憶うて捨て難く、うまれて人に過ぎたる豪放無遠慮の黒田健次いと昔に陪して鐵面皮づ／＼しくなりぬ、

さればこそ、たま／＼逢うての翌日、夜のあくるを待ち兼ねて尋ねゆくべき筈の健次は家において、來れば逢はむと悠々まつべき筈の倉橋わざ／＼訪ひ來し心のうちは、あはれ横紙やぶりの斯横著漢を説き伏せて世に出ださむとの友情一片、

さればまづ彼奴ほどの男を説かむには、正をもて論ぜむよりは奇をもて論ずるに如かずと、會釋もなく頭上よりあびせかけて官吏になれとぞ勧めぬ、加之も辨當小脇に搔い込んでテク／＼歩きの日給三四十錢の傭吏になれとぞ勧めぬ、

官吏おのづから官吏となるべき資格ありて、技倆に餘りありとも俄の一足飛びは所詮なりがたき今日、されば我に給料をすよむること必ず民間事業なるべく、いづれ會社の類ならむと思ひの外、日給三四十錢の備吏になれと打ち出されし時は、さすがの健次あつと呆れて言句なし、

されど思へば浮世、蜂は逆まに家を作つて棲むといへども、人は腦天を地につけて歩かれもせず、そもく倉橋の我に對する眞意は、こゝに我を恥かして奮勵一番の勇を呼ぶためか、但しは今の貧乏世帯を見抜いて徒らに飢渴を待たむよりは先づ其日々々の米鹽を凌いで後にせよとの事か、妻のお鳥が斯くまで落ち果てし我に伴うて更に怨み顔なき哀れを見兼ねての諫言か、倉橋もし眞に十年以來の我を知るならば、せめて月に百圓内外の給料それも我心を汲み兼ねて氣の毒けに言ひ出づべき筈を、何事ぞ更に恐るゝ色もなく三四十錢の日給取、

さりとは思ひ切つたることを吐したるかな、おもへば奴も昔の倉橋ならで、近來どうやら度胸骨が肥つたやうだわい、

さらばこの返答なんとしてくれむ、すねて首陽の蕨を食ふ野暮は學ばずとも米櫃に張る蜘蛛の巢は我に於て何の事なし、今に見よ床板なり響いて金庫の躍り出づべき工夫ありと吹き飛ばさむか、畜生いかに舊友たりとも近來ふざけた言を吐しをるかな、口で返答すべき前に片脚あけて土足の返答これ喰へと嚇さむか、ふよんと鼻で笑ひ肩で笑ひ臍で茶を沸かして一碗の馳走を振舞ひやらむか、いきなり胸倉とツちめて鐵拳ほかく、頭上に時ならぬ小山を築きくれむか、公等が言ふところ果して其外になかるべしと濟まして空を嘯きくれむか、事は小なりと雖も一期の腸を賣る男の大事、はて何と返答してくれう、

黒田健次うまれて官省の應接所に出でしこと今日が始めての男、およそ三十分は受附に待たせられて癩癩の蟲はや胸間に這ひ上りつと、下駄履きのまゝ兩肩を怒らして行かむとする背後より老ほれたる小使に叱られ前面より十二三の給仕に笑はれて青筋むらくと額に幾本、やうく應接所に入りて立腹まぎれの煙草ほかく、こゝに待つことまた三十分、えとどうしてくれうとテーブルの上に拳固こつこつ、四邊に啖を吐ッ掛けて纔に氣焰を壓ふる折しも、室外に靴音ひゞかして倉橋幸藏しづかに入り來りぬ、

『やア黒田、失敬々々、ちよいと仕事の都合があつてね、俄に手が放せないからよ、随分まつたらう』随分まつたらう、どころぢやアない大に待たされたよ、たしかに二時間は丸潰れ『いや氣の毒だツた、しかし今のところ別段いそがしい身體でもないやうだから、宜いぢやアないか二時間ぐらゐは』よくないね、頗る宜からずさ、かつて僕ア山中に途を失つて破れ

寺の軒下に空しく半日を潰した事もあるが、一種異様の臭氣紛々たる斯んな箱の中で二時間も待たされた事ア始めてだ、癩に觸るぜ』ハ、ハ、ハ、さう事々物々が癩に觸ッちやア困るな、時に今日わざく來たなア何の用だね、きのふ勧めた返事だらう』さうよ、その返事に來たのさ』ちやア、どうする、定めし氣焰萬丈、議論風生、憤怒の文句澤山で謝絶に來たのだらう』いや決して、實は君の説に従うて、黒田健次こゝに日給三十錢乃至四十錢の備吏すこぶる結構、御採用を願ひに來た、どうか御取持よろしく頼み入るだ』

倉橋幸藏しばし默然として兩腕を組みつと、今更ら健次の面を見詰めながら、『ふむ、いよく僕の説に伏して』伏した、謹んで君の高説に伏したよ』まつただね』世に向うて駄法螺は吹くといへども未だ曾て友を欺いたことなし、いはゆる虎を描き損ねて屋根裏の迷ひ猫にも及ばざりし健次が失敗の極こゝに我みづから我を罰して暫しの制裁に三十錢の日給備

吏むしろ僥倖だ、急に世話してくれ』おもしろい、君にして其言いよく、妙味ありだ、しかし黒田、わづか二時間ばかり應接所に待たせられて一種異様の臭氣粉々に堪へられない男が、辛抱できるかね』出来る、二時間まって痲癩に觸ったのは未だ日給取の傭吏たらざる黒田健次だ、我みづから我を罰した後の黒田健次は即ち珠玉を抱かずして罪なき小人さ、御心配に及ばず、大象の背骨を打つべき勇あつてこそ一轉たどちに二十日鼠を掌上に愛撫して餘念なき情致ありだ、かう見えても淺黃頭巾すほりと被れば忽ち濃厚の君子人だぜ』ハ、ハ、ハ、ハ、しかし其淺黃頭巾をりく脱いぢやア不可ンよ』暫時ぬぐの必要なし』よし、ぢやア明日から、すぐに出てくれ、日給三十六錢を給するから』なんだ三十六錢、おい倉橋、三十錢とか四十錢とかにしてくれ六錢の半端なざア呵しくないよ、まるで身體の切賣するやうだから』いけない、その言すでに宜くない、そもく三十錢より三十六錢の多額なるを知り給へ、また君が勉強次第で一二錢は上げてやるから』

男を立つるならば善かれ悪しかれ社會の大立物、金ならば十千萬兩も一掴みにせむと思つて、外面はノンコの洒アに暮せど心は稻妻の走るが如く、十年以來こゝに飛耳長目の黒田健次が、せめて年俸とか月給でもあることか一日怠れば忽ち一日分を引かるゝ日給取、しかも二錢の傭吏となりて、家に歸るや否や長火鉢の前に大胡坐の大息ほつと吐きぬ、『あゝ世といふものかい、馬鹿々々しい』

しきりに我身を嘲る如き歎息の體に、お島じろく良人の面を差覗きながら、『いやに今眞面目ですことね、どうかなすつて』なアに、どうもしないがね、浮世といふ奴ア随分ま／＼しいと云ふことよ』なぜです』なぜして和女、萬事おもふ通りにならないぢやアない

か、まよにならぬが浮世たアいへ、あんまり自由にならな過ぎるから乃公は嫌になつたよ世の中が、もう／＼人間は止めつちまひたい『ホ、、、人間が止めたいッて、をかした事を、人間を止めりやア死ぬより外はありませんよ』さうさ、死にたいのよ、臍でも嚙んで『セ、鬼の俄念佛とやらで、今日は妙に弱い音ばかりを、時に夕御飯は、人間が止め仰しやる位だから、どうせ召上らないでせうね』いや、喰ふ、菜は何だ』あれ、やッ上るの、めしあがると死に切れませんよ』ハ、、、、實ア死にたくないから大に食菜は何だ』菜々ッて、お菜は知れ切ッて在まさアね』知れ切つた菜は何だよ』くさやの干物』『また干物かい、何故さう干物ばかりを食はすんだ、稀にやア膏ツこいものを』だッて良人、魚屋が當家の門を通る時は黙ッて駆け出しますよ、兩隣りへはわざと大きな聲で吐鳴りながら』畜生、ふざけた奴だな、こんど通る時に薪雜木で向脛を搔ッばらッてやれ、生意氣に客種

を選びやアがるのが痛だ』ホ、、、、良人の腕次第、道路賣の魚屋風情よりやア今に御出入の料理屋から通はせませうよ、ねエ』むよそれが宜い、その料簡がなくツちやア不可ンよ、鱈の腐ツたのでも宜いから魚類が欲しいなソいふ奴は其人が性根の腐ツた證據だ、乃ち魚類を食はど正に獸上鯛の生肉を食ふべしだ、喰はざれば干物で堪忍すべしか、とはいふもの干物かい、あゝ干物、いやな干物だな、なぜ乃公にやアこの干物が執念ぶかく取ツつくだらう』いづれ前世の約束事でせうよ』いやな奴に約束されたもんだ』

おのが半面かくるとばかりの大茶碗とりあけて、つゞけざまに三四杯、『うまいく、文句はいふものゝ空腹だから頗る美味いよ、走るものは途を選ばず飢ゑたるものは食を選ばずだ、この様子ぢやア石ツころを舐ッても一月ぐらゐの生命は續くぜ、干物けつこう、うまいうまい』いつも良人が然ういふ御機嫌だと同じ貧乏しても苦勞の仕甲斐があるンですが、どうか

すると憎まれ口ばかり、妾だつて時々うんざりしますよ』だらうな、かはいさうに、もし乃公が和女だつたら一日も堪忍できないね、なんだ南瓜野郎いやに捻くれてばかり在やアがつて、とか何とか腹さしく、悪體ついて出てのくべき筈を、勿體ない、この南瓜野郎を守つて長の艱難辛苦、いや嬉しいぞ貞女、ありがたい乃公に過ぎたるものは和女と臆魂だ、臆魂いさよか人に過ぎたるがため却つて世に容れられず、和女が公乃に過ぎたるがため孤城落日ながらも斯うして其日々々を送られるのさ、ねエお島、わるい男に腐れ縁を繋いだなア』おや〜また氣やすめの御世辭が始つた、せめて其十分一が眞實なら女冥利に叶つた妾ですよ』

よほくの辻車さへ蹴込みに腰うちかけながら達磨煙管を咬へて分相應の容を呼びつゝ一日の飯米に迷はず、淺刺むきみを賣り歩く場末生育の小童さへ半日の稼業に身を立てよ鼻唄う

たふ世の中に、いやしくも多少の文字を解し物の道理の端くれを辨へたる大の男が、冷飯辨當小脇に掻い込んで朝夕やぶれ洋服テク〜通ひの小官吏ほど憫然なるものはなし、四肢五官さても何のために備へしやらむと十年以來の眉を擧めて人間ふしぎの一事に數へし黒田健次が、自己そも〜こよに日給三十六錢の傭吏とぞなりぬ、

日給三十六錢、午前八時より午後三時の退廳といへども其實は五時まで合はせて九時間に割り付ければ、課長の鼻息を窺ひ同僚の顔色を見ながら新參だけに人一倍の勉強が一時間わづかに銅貨四枚の價値、三十分が二錢、十分間が六厘六毛六絲、一分の勤務は穴のある鑿一文に及ばず、やう〜これを一ヶ月の精勤に積つて十圓八十錢、

宿昔青雲の志を溝泥板と共に踏み外して鼻の頭を摺り剥く事はあるとも、幾度か跳ね返つて都下百萬の夢を兎跳ねに飛び越えむと思ひし健次が、俄に勃々たる野心を壓へて闇雲の無

鐵砲を謹みつゝ、こゝに孜孜營々として凡俗の稿案に追ひ使はるゝ器械的の寫字生、しかも乾燥無味なる官文書の寫字生となりしは健次そも何の心ぞ、人間そもくゝいかなる作用の變化ぞや、されど健次は健次なり、節を折るといふ諺は世にあれども、現在うまれつゝいたる骨曲折つて日給三十六錢の奴となる能はず、志を改むるといふ語はあれども、元來の腸つかみ出して刀筆の犠牲に供する能はず、前後左右いづれを見ても何を喰ふやら血の氣の尠き顔色を並べて南瓜頭を終日の簿書に埋めつゝ頻りに筆を採る繁忙の中に、獨り飄然として間の抜けたる一種異様の面がまちを聳やしながら、煙草ふかく吹かして半眼に冷笑するが如き風情、課長が眼鏡越しの睨みも恐しからず、同僚が一所懸命の精勤さらに氣の毒とも思はず、おのれの受持書類は眼前に山をなして集れども平然として驚かず、たまゝ伏して紙に對へば狂歌狂文の樂書三昧、おしつけられて案文を寫せば二十五字詰の一行に必ず三四字の脱落、

強ひて迫れば、忽ち書き損ね、ゆるゝやれば草行楷の三體を取交せて無用の繁體に成り、果は自己ひとりか除外物にせらるゝ立腹まぎれか、但しは徒然のあまり例の入らざる駄洒落病を起してか、そろゝ兩隣席の勤勉生を誘ひ出して味方に引き入れむとするの工夫、おい君、あんまり精を出すゝ毒だぜ、よくまあ考へて見給へ、つまらない、生命あつての世の中に何のこつたい僅少の日給で、ちと彼女の惚け談話でも聞きたいね、かくすな畜生、ぶんなぐるぞ、などゝ怪しかる言語を放つて更に憚らざるのみか、をりくゝ傲然として給仕を呼び立つる聲は雷の如く廳中に響き渡り、いざ退廳の時刻といへば先登第一に駈け出して疾風に似たり、

つらく廳中を見渡すに如何なる親を持つて現世に生れしやらむ、さながら五體に電氣作

用をかけられたるが如き彼等が終日の精勤、しかも彼等とて路傍の草を抓ッて常食とはされず我と等しき米の飯を食ふ身、それを思へば許すかぎり出来得るかぎりに骨を惜しんで怠けぬいたる私の三十六錢なかく、高いものなり、

現金ならねど先づ今日の日給も無事に取りけり、いざや罷り歸ッて我ために天下第一人の知己たる妻を相手に、山海の珍味よりも優りし今の世帯の茶漬搔ッ込んで明日の世界を夢みむと、鬼のやうなる面相に阿彌陀かつきの古帽子、羽織は名ばかりの五所紋おほろけに、いかなる書生の形見なるらむ柳原の土堤を冷して俄に得たる小倉の襦袢袴、拇指の食み出でし紺足袋に緩みし下駄の鼻緒を引ッ掛けながら、飄然として立歸る背後より、『黒田さん、黒田氏』黒田さんとは殊勝なれど黒田氏とは時代めいたる頓間の呼びやう、何奴ぞと振り返れば近來同僚の三四人、いづれも怪しげなる和服洋服とりまぜて皆一様の空辨當を小脇に搔い込み

つと、しきりに我を呼ぶ風情は現世からなる貧乏神に後を躡けられたる心地しぬ、

『やア諸君、お先へ失敬した、時に何か御用ですかね』いや別段これといふ用も御坐いませんが、お互に机を並べながら役所では事務繁忙のために、ついで御話も出来ませんから、幸ひ御歸宅がけに『はよア歩きながら饒舌らうといふんですな、いや饒舌りませう、大に饒舌りませうが、まづ第一、諸君が日々の御勉勵、實に驚歎の外なしだね、よくまア終日あんなに勉強がつどきますね、僕なざア新參でもあり、かたぐい何が何だか更に仕事の順序が分らない上に、先天的の怠性と來て居るから堪らない、致々暈勉たる諸君の中に在ッて獨り惘然ほつねたる心中、むしろ却ッて苦難の極ですよ、ハ、ハ、ハ、ハ、爾後どうか宜しく御引立を願ッて、はやく日給の昇等を哀訴歎願の至りに堪へんです』なに貴君、お引立を願ふのは御同様お互の事ですから、時に御住居は、どちらで『上野の山の蔭です』では根岸で在ら

ツしやいますか』「まあ、其邊ですな』「御家族は』「しみつたれた駄女房が、一頭』「御言葉おそれ入りました、では御夫婦ぎりで』「さやう』「それは御氣樂ですな』「ハ、ハ、ハ、さう氣樂蜻蛉に見えますかな』「いえさ、氣樂蜻蛉これは甚だ、さういふ意味ぢやア御坐いません、たゞ御心配なからうと御羨み申したのです』「いや僕アまた却つて諸君を羨むね、何故、なぜツて、つらく、諸君が机に對うて事務を扱ふ工合を見るに、恰も快刀を以て亂麻を斷つが如く、わけの分らない書類が八方より蝟集混亂、忽ち眼前に山をなすとも更に驚かず、よく三寸の舌を謹み八寸の筆を驅つて電光石火の精勤ぶり、殆ど奇だね、いかに歲月經驗の效とはいへ實に妙だね、どうしてまアあんなに機敏だらうと新參の僕こゝに感服の外なしだ、人生そもそも業に精なるを以て忠とし職に敏なるを以て快とすだ、あゝ羨むに堪へたり諸君の今日、あはれ願はくば驥尾に附して日給の三四錢も上りたいね』

健次こゝに三十六錢の備吏となりてより八日目、まづ二圓八十八錢は既に懐中へ捻ぢ込んできたも同然、今日の日給を合はせて三圓二十四錢、いや妙々、さしあたり上野の山を空腹かよへて終日あゆめばとて淺草の中店を大眼球ひつくりかへして飛び廻ればとて白銅一枚を拾ふことと覺束なき世の中に、かりにも我みづから稼いで得たる金錢これが生來はじめての業、利害得失窮達消長は暫く別問題として、いや妙々、また今日も無事に罷りいでと凡俗の徒輩が一所懸命の體を見物しながら三十六錢ちよいと無償取の寸法、なアに國民の膏血しほりあけて肥馬輕車に乗り歩く大盜賊さへある官海の端くれに一ヶ月十圓八十錢の巾著切めいたる不埒そも、何の罪かある、追出さるまでは骨髄と落ち付けて件の如しと、午前八時の出勤を其日の十時頃のこゝ、出頭すれば、忽ち課長より別室に來よとの命令くだりぬ、

聞説この課長といふ奴、はじめは或官省の小使たりしを、買物の上手と眼前の小器用を基として上官の私用を辨じつゝ細君の間に重寶がられしが出世の發端、八圓の傭吏より二十幾年の春秋を経て今日やうく六十圓の月給取となりしほどあつて、其威權なかく凡人の及ぶところにあらず、月々驛遞局にあづけし五圓十圓も今は積んで幾百倍、またこれを小金に貸し出して利に利を重ねる片手業には、婚姻死生の取持世話より家屋賣買の周旋料に至るまで、何でも御坐れの熊鷹眼に萬事つつきまはす八丁口を鬚髯もて蔽ひながら、『黒田さん、全體、貴方は病氣でもあるのですか』いひつゝ健次の顔くつと睨みぬ、されど健次は例の平然として満面いよく恍けたる體、どかと其處なる椅子に腰うちかけながら、『いや壯健です、生來いまだ醫藥を知らざる奴で』ハ、ア身體に別條はないんですな』さやう』ぢやア今日なぜ遅刻したのです、いや今日ばかりではない、また遅刻のみでない、常に貴方が他の

吏員と異なつて、時に閑暇らしう見えるが、全體どういふものですか』まづ第一の御不審たる遅刻の儀については、今更ら愚癡ッほく申譯をするまでもなし、謹んで制裁を受けませう、次に諸員いづれも繁忙の中に私ばかり閑暇らしいとの仰せ、これは新古おのく執務の點に精粗繁簡の別あるがためと心得ます、しかし不肖も日を逐うて段々と事に馴れますから、おツつけ他の諸員同様、孜孜として黽勉いたす決心です、たゞ奈何せむ今のところ、さつぱり仕事に分りませんで困りますよ、恰も闇の中から牛を曳ッ張り出すが如き工合で、ハ、ハ、ハ、これは怪しからん、笑ひごつちやアない、いやしくも此處は嚴肅なる官衙ですよ、また苟且にも私は課長の職を奉じて貴方ア傭吏ですぜ』はッ、恐縮千萬、恐れ入りましたが、しかし課長殿閣下、こいつは言ひ悪い、ぢやア御免を蒙ッて簡單に課長さん』ちよいとお待ちなさい、貴方アをりく妙な言葉つかひをなさるね、氣をつけないと忽ち自分の進退

に關しますが、其透承知ですか』

月給六十圓の課長に叱られたる日給三十六錢の黒田健次、其まゝ晝の空辨當ひツさけながら小癩に觸つた今日の不平を吹き舞さむがため、倉橋幸藏が家に押し掛けて、あいつア食へぬ此奴ア飲めると注文の馳走に腹さ〜飽いたる後、また例の横著車そろ〜曳き出しぬ、

『おい倉橋、酔つて言ふぢやアないが全體、あの課長といふ奴、いやにイケすかない野郎だぜ、神龍しばらく凹垂れて池中にあるとも知らず、今日この乃公を呼び付けてさ、恐れ氣もなく小言の段々よ』ハ、ア何と言つて君を遣つたね』なアにつまらない事よ、朝は時刻に後れて出るとか、いや諸員が一所懸命の中で獨り惘然してるとか、それも宜いが最後の言草が續に

觸つたね、氣をつけないと忽ち自分の進退に關しますが其透承知ですか、と吐すのよ、ハ、ハ、ハ、三十六錢の進退な〜ア當人の乃公に馬鹿念を押さなくつても勝手次第にするが宜いさ〜いや、さうでない、課長のいふところ萬事道理だ、苟且にも最初から三十六錢の日給は君に過ぎてゐるからね』なんだ三十六錢の日給が乃公に過ぎてゐる』もとより、過分だ、そも〜君の如き不規律にして不作法なる男は元來官省で使へないんだ、ところを僕が口次で、やつと出られたばかりの今日、致々として勉強し給へ、君にして一個月十圓八十錢にもなること殆ど異數だよ』おや、戯言ぢやアない倉橋、ふざけちア不可ンよ』戯言にあらず、ふざけたンでもない、全くの事だ、それとも君が半日の氣焔どれほどの價値がある、終日の駄法螺が果して一掴みの玄米を得らるよかね、氣焔を吐くものは既に腹中の氣焔その用をなす能はざるが故だ、駄法螺を吹くものは既に胸中の法螺貝ぶちわれて役に立たない證據だ、ハ

最後の黒田健次

ハ、ハ、ハ、ふざけるなどは僕より君に呈すべき言だぜ、戲言ぢやアない眞面目に勉強し給へ、よく屈するものにして能く伸ぶべしだ、屈すべき時に屈し得ない奴が伸ぶべき時に伸びた事なし、ハ、ハ、ハ、どうだ黒田』

健次おもはず愁然として、兩眼に涙なけれど兩の拳に押し拭ひつゝ、今更ら倉橋の面上しみみ見詰ながら、『あゝ倉橋、惜しむべし倉橋、いたむべきかな倉橋、乃公にして三十六銭の日給過分を叫ばると前、まづ君に對うて痛息歎息の至極に堪へざるものありだ』ふとむ、何だね』外でもない君にして既に厭ふべきの吏臭紛々たるの一事さ』いや黒田、官吏にして吏臭紛々たるもの始めて職を曠しうせずだ、僕いまだ自ら吏臭の足らざるを恐る、吏臭なるかな吏臭なるかな、さらに大に吏臭たらむことを力むだ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、日給取にして日給取の臭氣なきものは是むしろ盗賊に等しだね、僕が心中こよ一月も経過せば君に一錢乃至二錢

の昇等をさせてやりたいと思つて居たが、まづ止さうよ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、それとも今日の課長が言々辭々は服して爾後あらたむるなら』

健次さらに呆れて言句なく、ひっさけ來りし空辨當がらりと抛け出しながら、『おい倉橋、友達甲斐だ、その辨當へ何か美味い物を詰めてくれ、また歸つて細君に頒つべしだ』いや、よろしい、そんな事なら満身の友情を以て君の好物次第、まづ馳走の注文し給へ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

我みづから我を落して暫し凡俗の奴となればこそ、六十圓の月給を天下取とも心得たる課長に叱られ、小癩に觸つた満身の不平を洩らすべきところは、破鍋たゝいて語りし昔の朋友、今の高等官たる我身の保證人、倉橋幸藏の外になしと、押し掛けて文句さんくゝ吹き込みし

甲斐もなく、情なや此奴までが更臭紛々として逆まに我を嘲る如き今夜の癡言、畜生、もはや議論も洒落も無用の奴となりけり、いざ然らばと空辨當なけいだして注文の馳走せめての腹癒せに詰めさせたるまよ、ひッさけて家に歸れば夜の十時を過ぎぬ、

「おい今もどつたよ、つい遅くなつてね」いひつと曲みし長火鉢の前に坐して、兩手を顔に臑つきながら見れば、天井より吊ランプの光りも届かぬ薄闇き臺所に、今しもお鳥が襷がけの働きぶり、その後影の何處となく打濁れて瘦せ細りたる風情、雪を欺く眞白の襟首に貧乏世帯の亂れかよりし黒髪くろかみの結ほれ、さても女の花は男の腕の培養次第、勘忍せよと心に泣いて詫ぶるも知らず心地よけに振り返りつよ、「ちよいと良人、お待ちなさいよ、手を放されない事をして在ますから」なんだよ今時分、翌朝の用意なら、もう時間が遅いから、うツちやつて寝なよ」なアに良人、今日はね、妾の誕生日ですから心ばかりの手料理で一杯あけたいと思つてさ、ホ、ホ、ホ、しかし大變な御馳走ですから驚いちやアいけませんよ」むよさうか、和女の誕生日、むよさうか和女の、嗚呼さうだつたかい」なんですよ、さうか然うかつて「いや實に、なア、一年一度の誕生日によ、くすほりかへつた其風姿で、しかも乾上つた貧乏世帯の臺所に、いや實に氣の毒だ、しかしそいつを泣きもせいで、この夜更に乃公の歸宅を待ち受けての貞心、お鳥堪忍してくれ、よ、いつも同じ口上ばかりで何の證據もないが、今すこしの間だ」あれ、また、ゼンたい良人ア強いやうで弱いことね、ちツと確固なさいよ、馬鹿々々しい、世の中は走馬燈籠でさアね」おいよ、それくらゐの事は萬々承知しすぎての困り者だが、これでも稀にやア本心に立歸るさ、おのが身は山河顛倒の神算鬼謀こよに破れて三十六錢の日給取、また和女は玉の輿ままと乗り損うて乃公のやうな狂者に今更ら切られぬ腐れ縁、いッそのこと、おもひきつて、遣つて退けべいか」おもひきつて、何をです」

「いやさ最後の工夫をさ、毎日々々馬鹿口ばかり聞いて居ても、腹の底にやア別に一物、とツておきの謀略があるからさ、こいつア一番こゝで遣り時機かも知れないて、ふよむン」

「良人もう八時ですよ、疾に七時は過ぎましたよ、良人ツてば、よう良辰、仕様がなしたことねエ」いひつゝ三十六錢の禮服たる襦袢袴を枕頭に突き付けられて、あはれ今日の浮世奴がまた襲ひにけるかと、一夜やすめし手足あらたに力を込めての大欠伸、うちかぶりし夜具もろとも寢惚眼を開いて頭を持ち上げれば、お島おもはずホ、と笑うて指さしながら、「さアく、越後の國から罷り出ました角兵衛獅子、起きたり起きたり」なんだ、角兵衛獅子だ、おもしろい、角兵衛獅子たア面白いね、よく言ツてくれた、すこぶる妙だ、およそ人は豆粒ほどの小石に躓いても忽ち中心を失ツて顛倒る世の中に、きやつ角兵衛獅子なるもの、宙に

翻ツて倒れず逆さに飛んで過たす、縦横十文字おもふがまよに身を鞠として天下いたるところを顛り歩く奴、しかも顛り歩いて一身の食を「あれさ、また理の分らない文句が始つたことよ、さアく、黙ツて起きたり起きたり」「いざ然らば起きるべい、あゝ起きよう、どりや、起きますべいか」「やれく、御苦労さま」「これは恐れ入った、しかし此男、起きて何をかする、あはれむべし日給三十六錢の傭吏、また課長に吐られ同僚に笑はれて、ハ、ハ、ハ、ハ、さすがの健次君、だめだなア」

自己みづから自己を嘲ツて起き出でながら、齒磨楊枝手拭とりそろへて表出すお島が顔を、良人の身として見ぬふりに見る心の苦しさを、「ねエお島、今日は病氣届をして休まうか」「なぜです、どツか、おわるいの」「なアに貧乏するほど身體は鐵石、どこも悪かアないが、なんだか氣がすよまないよ、前夜の今朝だから前夜の今朝ツて、何の事です」「つまり和女が誕

生日の翌日だからよ」おや、妙なことを「妙ぢやアない、すこぶる大に不妙だよ、七年これまで連れ添った女房一人の誕生日に、頭のついた魚一尾もないたア、實に我ながら、なさけないよ、だから前夜も言つた通り、いッその事、この乃公が死活の境に施すべきための一物とッておきの最後尻を放らうと思ふのさ、そもくこの屁たるや」「いやですよ、馬鹿らしい、」
「いや戯言は儲おいて、眞實の相談よ、つらく考へてみると、いかに洒落半分の氣保養かたぐしたアいへ、一日三十六錢で可憐ら男の切賣は勿體ないよ、しかも實際は、なか／＼うるさい糞面倒な仕事ばかりで、やはり日給取の備吏根性に生れて來なきやア所詮つとまらな
い、兎角、附焼刃は不可ンよ、是に於てか最後屁の必要ありだ」
「鼬ちやあるまいし、人間の最後屁たアドンな事です」
「人間ッて、むやみに尋常の人間にやアないが、この乃公には正にありさ、乃ち外でもない、一躍して忽ち富貴王侯に比すべき大事業さ」
「およしなさいよ、ま

たいつもの「またいつもの何だ」
「寢言のあまり」
「寢言、あゝ乃公も此に至ッては涙なりけり
だな、智囊を揮ッて驚天動地の謀略を語らむと欲すれば、現在つれ添ふ妻が口より、およし
なさいよ寢言のあまりと一喝せられて「一喝か二喝か知りませんが、さしあたり今朝は何う
なさいますの、出るんですか、出ないんですか」
「出ない、斷じて出ないよ、兎も角も今日の
三十六錢を空にして、おもふまゝ饒舌らしくしてくれろ」
「おやく、良人に思ふまゝ饒舌られち
やア生命にかゝはりますよ」

いづれ一時のこと、ものと二十日も續けば大極上、まる一月を無事に通せば希代の珍事と豫
て覺悟のお島、今更に驚かねども、はや十日目に何うやら氣の進まぬ様子、しかも一片の病
氣届さへ出さで其まゝ其日を休みしは、さてこそ抛け遣りの本性あらはれにけりと思ひの

外、さはなくて翌る日は早朝より心地よけに例の襦袢袴ひツかけて立出でし後姿、いたはしや、足手まとひの我身ある故かと思はず涙ぐみて見送れば、健次しづかに門口より振返りて、「留守中は氣をつけなよ」いつになき優しの言葉いよく、哀れに聞えぬ、

其日の午後四時、もはや五時にも近きころ、やがて良人の歸るべき時刻と、お島が心まちの門口に郵便と叫ぶ聲、今この隠れ家に何處よりぞと取上げて見れば、おもひきや正しく良人の筆、しかも六錢の切手を張りし厚封おしければ、幾重にも巻き込んだる中よりわざと揉み抜いて綿のやうなる一圓札三枚ひらくと落ちぬ、

お島はツと氣を焦ちて、この書狀を讀み下せば、言葉書いちくく假名もて細かなり、

いづこに何の取得もなく世上の男一人に缺けたる我身を、この年ごろの貧苦を守りて怨み顔さへ見せぬ心づくしのほど、今更うれしさの申し上げやうもなし、さ候へば我身の

所存は差置き、せめて今の世帯の片扶けにも相成候はむと、しばし本心をなけうちて今日まで萬々しのび候へども、あはれ三十六錢の日給おもへばくいかにも歎かはしく淺ましく、苦しきあまり堪へ兼ねて辭職いたし候十一日の勤務に候へども昨日一日の病氣休みを差引かれて十日の勘定三圓六十錢、このうち六十錢だけ我身につけて今日より四五日うるつき申し候まよ、こゝに封じこみ候三圓にて其間の不自由を凌ぎたまはるべく、委細は歸り候上にて萬事相わかり申すべく候、

人並の便りともなりかね候我身ながら、こゝ四五日も歸宅いたさず候へば、嘔や淋しく定めし心細き事もあるべく、まして今の憂きを語らむ親兄弟もなき茅屋の寢覺め勝、いづれ涙ばかりのほど萬々さつし候へども、かよる變物を男に持ちし身の不幸とあきらめて、あとはいはでも御覽の通りの始末あらくとも

健より

お島ぼう

連れ添ふ妻が良人を思ふ世の常習、我慾目かは知らねども、そも馴れ染めし最初より一癖とこやら世の人に抜け出でよ、みたばかりの姿あのまよでは終るまじき人、よし終らむとても女の一念おのれやれ、これまで盡せし我苦勞の力だけでも天晴れ男にしてみむものと、數ふれば七年の春秋、今更なまじひ急き立てよ身の安賣させむこと口惜しく淺ましく、こよそ浮世の踏み處じつと堪へし甲斐もなう、あはれ寄せ來る貧の責め苦に切り落されて、いたはしや日に三十六錢の備吏とまで成り下けし我身の過誤、わづか十日に打棄てよ何處ともなく出で行かれしこそ道理々々、いのるは佛神あはれみて良人が上を守らせ給へ、連れ添ふ妻が何

より證據、あの口ほどではなき心の潔白男、

さるにても三圓六十錢のうち、貧こそすれ雨露にも打たれぬ女一人の我身に三圓を残しおき、たとひ四五日たりとも路頭に彷徨ふ男の身に六十錢、そもや何として飢渴を凌ぐべきや、おもへば罪ふかき我身なり、もし我身なかりせば世上の八方とびまはッても立つべき丈夫の男、かくまでの哀れに逢ふまじと、夜一夜いねもやらで涙にあかせし翌の日の朝、かの倉橋幸藏ふいと訪ひ來りぬ、『黒田は居りますまいね』

黒田をりますかと訪ひ來るべき筈を、黒田をりますまいと訪ひ來る上は、さてこそ豫てより聞き及ぶ昔日の朋友甲斐、定めし斯人に問はど良人の仔細わかるべしと、よろこび勇んで迎ふれば、倉橋しづかに座を占めて慇懃に禮を施しながら、『定めし御承知でせう、黒田は昨日、突然辭職しましたが、其節、私への置手紙に、少し考案があるから四五日どツかへ出

最後の黒田健次

て行くとの事』いえ、それで前夜から心配いたしてをりますが、何分あの通りの氣性で御坐いますから、をりくふいと唐突な事をされるには實に困ります』でせうな、時に今日のわざくまるったのは外でもありません、實は過般來、三十六錢の日給を勤めたのも聊か計畫のあつた事で、決して黒田を三十六錢に買つた所以ぢアないんです、しかし、その計畫いだ効果の一端を奏さないうちに』いひつゝホツケツトより百圓束を差出してお島の前に置くながら、『餘談は借置き、まづこゝに百圓、これを和女に上げておきますから、當分祕密で、いづれ黒田が歸ると直に金策の必要が起りませうから、其節、和女の手より、決して私から出たと言はないで、委細は他日わかりますから』

いかに貧苦に迫ればとて、いかに心の靜肅なればとて、あれほどの男一貫を取持つに三

十六錢の日給とは何事ぞ、しかも所詮つゞくまじき良人の氣性を知りながら、わざと仔細らしき肝煎顔の腹立たしや、さても聞き及ぶ昔の友達甲斐はなき人と恨みに怨みし倉橋が、さもなくして辭職せし其翌日、ふいと訪ひ來て百圓の金を抛け出しつゝ、まづ當分は黒田へ祕密々々、やがて金のゆる男泣きの時あるべし、其時こそは其金その金と、裏に廻つて人には知れぬ誠の眞實に、今更ら女心の淺果敢に怨みしことの愧かしや、かゝる貧しき時には親しき人の心さへ離れて、たとひ一圓の金を證文かいて借り出すにも、文句たらふく無用の意見を添へらるゝが常の世の中に、わざと表面は邪慳に見せて心のうちは飽くまで思ふ實の友情、その芳志に對しても此百圓やすく尋常の衣食に費すべきや、心を鬼にして良人が血の涙に泣くまではと、幾重の紙に包み帶揚に封じ込みて、日夜の腰邊を放さず心ひとつに祕めてく祕め置きぬ、

さはさりながら今日で三日目、いかにして何處に彷徨ふやら、わづか六十錢なんとして何の用にか立つべきぞ、世上の人一倍に心も猛く氣も疾きだけ嘸や口惜しく悲しさの深からむ、しかも春とはいへど大地も龜裂るよ此ごろの寒天に、勞れし脚を引き摺り飢ゑたる腹を抱へて何の的もなく、身に染む夜の霜さへ凌がむ術もなき痛ましさを、さるを連れ添ふ妻が身として疊の上の枕につかむこと勿體なし冥加おそろし、せめては破れしシャツを縫くりて歸りきませし時の荒れたる肌を防がむと、心もろとも細く淋しき吊ランプの下に、物思ひの涙片手に針の運びの遅き折しも、「おい〜お島、お島」

呼びしは正しく良人の聲、はつと振り返つて四邊を見廻せど影もなし、うつゝにあらす夢にあらす、さては心の迷ひかと差俯いて、またもや針の目に餘念なき折しも、「お島、乃公だよ、おい此處だ、あけてくれ」

一度ならず二度までも呼ぶ聲に、お島ふりかへりて眉を蹙めつゝ見れば、勝手しつたる門口の半窓を外面より引き開けて、内より照らすランプの光りに良人の顔、今の今まで胸を痛めし良人が顔、やれ嬉しやと飛び立つべき筈ながら、その無事の顔みてからは女心、どうやら落ち付きて却つて腹立たしく、わざと起ちもせず額越しにじろ〜無言の體を、あはれ寒風に吹き曝されて軒端に立往生の健次、「おい〜、あけてくれないか、あけろといふに」お島いよく〜落ち付いて、さらに針の手も放さず言葉しづかに、「おい〜ツて何誰で御座います、貧乏はいたしますが、お島々々と呼び捨てにされる人はない筈ですよ」

健次たまたま地踏鞠ふんでの大聲「畜生、餘計な處で戲けるない、乃公だよ、自分の旦那様を忘れる女があるもんか、馬鹿」おやく〜良人ですか「おやく〜良人ですかたア何のこつた、

乃公だよ、乃公だぞ、『わかりましたよ、その乃公は、今あけますから其處に、おとなしくして在らっしゃい御近處が迷惑ですわ』

わづか六十錢を身につけて、あはれ此寒天に何處を彷徨ひけむ、やうく、四日目の夜更け人定まりし後、門の戸も叩かず半窓より首さし出して歸り來りし健次、なんとなく打濁れて窪める眼を光らしながら、まづさしあたり腹を抱へて、『おい飯だく』

お島しみく心に泣けども、わざと眼に持つ涙をかくして、『良人まア四日の間どこに何をして在らしたの、さんふ、胸の痛くなるほど妾に心配さして、そして自分も歸るが早い飯だく』、しかしそれほど何か苦勞の甲斐がありましたの、いづれ效能があつたから、お歸りなすつたんでせうね、あら嬉しいことよ、『おい、さう嚴しく言はないでも宜いぢやア

ないか、かはいさうに四日四夜ぶつ通して、大の男くく、眠りもしなかつたぜ』ですが、さ、それほどの苦勞なざるにやア、いづれ立派な目的のあることでせうと、『目的はあつたのさ、随分面白い目的で、加之も十中の八九は我掌中にありと思つたところが、ハ、ハ、ハ、ハ、呵しいもんだね世の中は』『なにが呵しいんです』『なにツて、ハ、ハ、ハ、ハ、いくら考へても呵しいよ、實に呵しい、ハ、ハ、ハ、ハ、』『おや、何が、そんなに呵しいんですツてば』『外でもないが、今も言つた通り、十中八九は我物と思ひし目的が、がらりと外れた其外れ鹽梅が奇だつたよ、呵しかつたのさ』『なんだか良人の仰しやることア當分わかりませんわ』『當分わからないア流石に乃公の女房だ、他日判然するからね、まア當分わからないで措いてくれろよ、時に先刻歎願の飯は如何になりましたな、どうか一杯』『なさけない事をお言ひなさなね、馬鹿々々しい、しかしお飯は冷えて在ますから、いッその事あつたかいお粥でも拵へま

せうか『ありがたい、なア、破れても自分の家にかぎるよ、あつたかい粥に生鶏卵ぶツかけの半熟うまいな』『鶏卵なんかありませんよ』『鶏卵がなくツちやア粥といふやつ少々なんだな』『少々なんですツて』『いや結構、茶腹一刻、粥腹三刻いや結構だ』

わづか六十錢を身につけて四日開いづこともなくうろつき歩きしは、果して健次いかなる心算あつての業か、白晝大手を振ツて歸りも得せず夜更け人定まツて後、すごくと這ひ込むや否、空腹かよへて飯だくの哀れさは、此奴また例の闇雲に飛び乗ツて踏み外したる證據なるべし、

繼母に責められて突き出された瘡み根性の悪太郎ぢやアあるまいし、あてもなく此寒天に四日四夜も何處を彷徨けるもんかね、しかも三十男が一圓たらずの目腐れ金を持つてさ、まこ

と此胸を打割れば髓に半日饑舌りつどけるだけの議論、いや道理も仔細もあるが、死兒の年齢を算ふると一般、遣り損ツた道行の穿鑿は大の嫌ひだ、そこで此方の唐變木また狂氣を起したと見れば濟むこと、四日の間この貧乏世帯に加之も大喰ひ一人分の飯を剽したと思へば經濟の一端にもなるさ、ハ、ハ、ハ、と大口あいて笑ふ外は、お島いかに問へども健次さらに無言、

其夜もあけての朝、健次また何處へか立出でむとするに、お島おもはず眉を擧めて、『朝の御飯も召上らないで何處へ往らッしやるの、良人まだ疲勞も休まないでせうに』なアに、もう疲勞はなくなツたよ、四日間うろつきまはツた遣り損ひは遣り損ひに違ひないが、前夜つらく思ふに、こいつ物の考へ次第また敵手次第で、或は息の根を吹ツ返すかも知れないで、ところで、ちよいと或奴を尋ねに行くのさ、すぐに歸ツて来るから、飯か、飯は先方で喰ふ

「は、ア倉橋さんでせう」まづさうだな、あの畜生、おもひきつて乃公を三十六銭の日給に押し付けたところを見ると、いや少しやア昔と違つて談せるかも知れないよ、以前より聊か度胸が出来て居るらしいから「だって良人、たとひ何にせよ折角、世話していただいたのを一月も勤めないで、辭職したあけくに、また物を頼みに「なアに頼むんぢやアないよ、いはど彼奴に此方から教へてやるんだよ」

午前六時、倉橋幸藏が玄關より家内に響きわたる大聲張り上げて、健次わざと怒れる兩肩山の如く面つき獅子の吼ゆるに似たり、「たのむウ、おい取次の者をらんか、たのむぞ」

三十六銭の日給いづれ一月か、ながくて二月と思ひの外、ものよ半月も経たぬうち忽ち癩癩玉を踏み潰して飛び出すや否、四五日いづこともなく彷徨きし結果、また舞ひ戻つて玄關よ

り早朝に吐鳴り込む黒田の聲、さては熱の吹き返しに來りしならむと倉橋幸藏わざと慇懃に迎へて奥の一室に誘へば、例に依つて例の如き健次かくても更に屈する體なく、からくと大口あいて笑ひながら、「やアお早う、時に過日は濟まなかつたね」倉橋しづかに健次の顔を見詰めながら、「今更ら愚癡をいふぢやアないが、君の無責任には困るな、半月も續かないほどなら最初から止せば宜いに、いや志を改めるとか、大に伸ぶるがため大に屈するとか、いや我みづから我を叱咤するがための制裁だとか「恐れ入つた、一言なし、實は全く其決心だつたがね、儲どうも堪らなかつたよ、無鐵砲の野猪いたづらに坊間に棲む能はずでな、兎角穴ちがひだよ、ハ、ハ、ハ、ハ、」あゝ無鐵砲の野猪たる君にして坊間よく三十六銭の日給にせめて半年を甘んずるの奇あらば、君また一の豪傑おそるべきところだが、やはり嫌な所は嫌といふ單純の凡俗だから困るよ、時に其後、四五日の間どこをコツキあるいたね」なる

ほど、しかし、嫌なところを嫌といふ、これを大にして始めて豪傑となり、これを少にして始めて凡俗たるを知る、氣に喰はぬ萬金を鼻息で吹き飛ばすの聊か大なるを知れども、我いまだ日給三十六錢に屈するを以て大なりとする能はずだ、ハ、、、また四五日うるつきの子細これも其效なき今に於て繰り返すの要なし、たゞ例の如く人魂然として日夜東京中をフハついたが儘そのフハく、甲斐もなく遂にまたフハくたる逆戻りの體と、君が朝來の一笑に付せられて可なりだよ、ハ、、、、『むよ、そいぢやア別に僕より聞くこともない、ところで今朝、わざく君が來訪の用事は何だね』その用事いさよか君のために善くない用事だがね、聴いてくれるか舊友黒田健次を猶いまだ捨てずに、『いかに舊友でも親友でも事實に於て力の及ばない事は』無論、出来ぬ相談を人にかける僕ぢやアない』それでは何だね』金だ、五十圓ほど借りたい』絶對的に出来ない、一錢も難し、白銅一枚なほさらのこと、

一圓に至つては夢にも叶はない、もしそれ五十圓の大金は死すともだ、僕が一個月の給料三分の一だもの、どうして〜』

さすがの健次さらに言葉もなく、倉橋の面上ぐツと見詰めて兩腕くみながら、『自分が身勝手
の依頼を謝絶されて怨むほどの没分曉漢ぢやアないが、倉橋、今、君の斷りやうは随分おつ
だね、御丁寧すぎるな』いや、なんと聞えたか知らないが、一切無用、出来ないよ、そもそ
もこゝ七八年以前の汐入村で艱苦を俱にした五人のうち、大に悟つたとか嘯つたとか言ッ
て君ひとり飄然と立去つた後、残る四人は猶も一所懸命に三年の苦學難行、まづ其甲斐あッ
て今日のところ皆それく、相應の衣食にありついて居るが、過日ふいと八年ぶりで逢つた君
は何ぞ圖らむ、むかしのまよの黒田健次、否、その容貌風采のみならず、その駄洒落駄法螺
も依然として、實に驚いたね、ところでわざと外の三人へは知らせないで、僕ひとりの手前

なんとか工夫をつけたいと思つたが、儲さしあつて場處もないから、まづ三十六銭の日給、
 しかも尤も君に不適當なるところを擇んだのは、乃ち三十六銭を以て君が他日の消長、否、
 本音を試験してみたのだ、しかるに忽ち落第なされたは、ね、もはや無効だよ、無効となれ
 ば文久一枚も惜しいね、もしそれ無効ならすんば不肖ながら倉橋幸藏この瘦せ身代を叩き潰
 しても厭はずだ、その舊友たると、たらざるとは問ふところにあらずだ、もう君には面會も
 今日かぎり、世の中に倉橋なる友ありと思ひ給ふな、君の如き人間に友達呼はりされちやア、
 面目ないから、交際場裡に不名譽を來すからね、ハ、、、、どりや出勤の時間が來たか
 ら、これで御免を蒙らう』いひつゝ起つて一室に入る後姿を、健次じろりと睨みあけて目
 鼻を一所に寄せながら、泣くが如く怒るが如く嘲るが如く冷かに笑ひぬ、『ふざけた事を吐す
 わい、フ、、、、』

人は三年にして志をうつし心を變ずるの世諺、されば別れてより八年の友、しかも今は官
 海の衣食住、いづれ昔のまよの倉橋幸藏ならずとは知れども、彼に取つて月給の三分一を男
 泣きの涙に口説き落さば必ず落つべし、彼が世話甲斐の日給三十六銭を抛ちしは別問題と思
 ひの外、入らざる穿鑿さんく罵詈訶弄を極めしのみか白銅一枚も叶はずと吐したる上、さ
 らに文句を添へて此後の友達呼はり無用とは畜生あくまで我を蹂躪つたる一言、やはか其ま
 ま棄て置くべきや、誰とか思ふ一飯の恩も身に染みて忘れざれども一睨の怨恨も返さずば濟
 まぬ心の黒田健次、この眼の黒きうちは、おのれやれ、今に見よ、今に見よ、
 いかりの面上に朱を注いで倉橋の立關より飛び出したる健次、立腹まぎれの力瘤にステッキ
 の折るとばかり三四度ふりかへつて門の扉を叩きながら、この寒天の額に帽子際を濡らす膏

汗、一文字の太き眉を逆立て、來かよる背後より、いづこの何者やらむ華奢をつくせし若夫婦がメリケン馬車の合乗に砂煙を立てよ、あれがホーカイ節でも唄ふ落魄書生かといひたけに見下しながら過ぎ行くを、健次おもはず兩眼くわツと見開いて、きりくると齒を噛みぬ、先祖の物か家の福かは知らねども、今あの衣裳を引ツペがして馬車より道の中央に突き落せば、天日に曝した番の芋蟲同様、息のあるうちは身動きすれど、わづか一時か半時に忽ち其まよ死すべき奴等、こゝろを何ぞや天下の公道おのれの物として肥馬輕車をきしらせ、歩くための脚もて歩く我を珍らしけに見下したる面つき、とは思へども彼奴等と我の間に黄金といふ厚板の隔離物、倉橋といひ今あの馬車といひ、あゝ金なるかな、金なる哉、

いはゆる竹馬の友ならねども、三年の苦學難行を俱にせし舊友たり親友たり刎頭の友たりし

倉橋幸藏に辱かしめられ、憤怒の心頭むらぐると燃え立つばかりに歸る途上、背後より若夫婦が合乗の馬車の砂煙を頭上より浴びせられて、しかもホーカイ節の落魄書生かと指笑の間に見下されたる健次、やうく家に歸るが否、抛ぐるが如く身を横たへて大息ほツと吐きぬ、

「あゝ何だか氣持が悪い、お島、床を取ツてくれ、今日は此まよ寝るだ」
くよくと物おもうて待ち受けしお島は、はやくも良人の顔色を見て取ツて、心に何か事の叶はぬ筋ありと知りながら、わざと言葉を重ねて其筋を問ひ詰むの工夫、「だから良人さう言ツたんですよ、今朝はお止しなさいと、四日四夜も勞れ切ツた身體ですもの、時に倉橋さんは家に在らしツたの、お不在でしたか」「むと在たよ、しかし、あの野郎だめだ、少々乃公は買ひ過ぎてかよツたから猶更ら胸糞が悪いや」「ホ、、、胸糞ツて、馬鹿々々しい人の胸に糞が、ホ、、、」「むねツ糞が悪いのよ、乃ち糞を喰ツて胸に支へたやうな、心持がする

といふこつた『何故まアそんなに、何か倉橋さんと議論でもなすつたの』『なアに、あの木偶人、病鴉の出養生みたやうに今ぢやア、おつう小高く止りやアがツて、議論するほどの價値もないから黙ツて歸ツたがね、お島、人間といふもなア不可ンよ、なまじツか飯粒が多いと足の裏にくつついて自由の働きがなくなるからな、まア乃公のやうな貧乏の間が人の花かも知れない、とはいふものゝ貧乏花といふ奴、あんまり長く咲かれちやア御免だね、ハ、ハ、ハ、』しかし良人、また何か無理な事を言ツたからでせう』『なに無理をいふもンか、却ツて物の道理を聞かしたのさ、そいつを跳ね付けるも宜いがね、たゞ跳ね付けやうが癢に觸ツたよ、畜生、今に吼面かよしてやる心算だが、あゝ差當ツて世の中は』『さしあたツて世の中は何です』『その世の中がよ、ちよツ、いまくしいなア、どりや寢てくれべい、煎餅蒲團の柏餅これを常坐の御馳走として我身の鬨を音楽とし鼻の穴から吹き出る提灯を電燈と心得、

いざ御禮の夢でも見ようかい』

倉橋が許より立歸ツたる其日は半日の枕につけども眠られず、夕餐の飯を退けて悲憤さらに一番やけ酒の熱爛六七合ぐツと瀧呑みにして、其まゝろ、やうく眼を覺して四邊を見れどお島の影なし、家内を大聲あけて三四度よびながら、ふと枕頭をみれば一通の遺書、古ハンカチーフに包みしもの一個、

さすがの健次はツと驚いて膝立て直しながら、まづその書を取ツて披けば、

涙ながらに申し上げり、これまで七年の長の月日ふつよかなる我身を嫌ともおほしめさず、女子の道には何ひとつ叶はぬおろかの生れをも棄てたまはず今日までの御なさけ、

最後の黒田健次

しみぐうれしく其うれしさのあまり日夜たどく、我身の腑甲斐なき事のみ悲しく怨みに堪へ兼ね候、世には妻の身が人しれぬ働きにて猶更ら良人の名を幾重にも高くいたし候、事など聞き及び候たびに、一しほ我身の萬事に届かぬ浅ましさも立添ひ別けて此ごろの足らぬ勝なる世帯に御苦勞のみ日に増す痛はしさを見るにつけて、もしや足手まとひの我身ある故、かくまでの御難義あそばされ候かと思ひらくうては、あるにもあられず眞實こころから死にたきやうにも相成り申し候、

それにつき、まことに／＼辛く苦しく悲しくおほえ候へども、こよしばしの間この身に御いとま下されたく願ひ上げらる、

御いとまを願ひ上げ候とて世にあるかぎりには黒田健次が妻の島、決して／＼御顔を汚すやうなる事は神かけていたすまじく、たどく／＼しばしの間かなしけれど心を鬼にして御

傍を離れ候へば却つて御ためにもよろしからむと日夜おもひつめての御ねがひに御坐候、たらはぬ女子の我さへ御さまたけ致さず候へば、自然と御こころも安く御身も軽う世に思ひのまよの御ちからも伸び平生の御こころざしも立ち候事と、これ一事を行末の樂しみに今の別れの悲しさを忍び申し候、心の裡いかなるべき御さつし下さるべく候、せめて三年の間とは思ひ候へども、どうぞや、どうぞや、一年にて御こころざしの相立ち候やう、かけながらいのりあけらる、御出世の首途に不吉の事申し上げ候やうなれど、もしこのまよ一年すぎて後たとひ今と同じき御身にても、其節は御呼び戻し下されたく一年以上も御別れ申し上げ候、事は十年の榮華に代へても忍びがたく堪へがたく候、我身いづこにいかなる事いたし候とも、一年間は無きものとあきらめて、たどく／＼一途に御出世下されたく、その御こころざしの立ち候節は五つ六つの新聞に、何町何番地黒

田健次と、これだけの廣告あそばされたく、其廣告の翌日は必ず御たづね申し上げべく候、また只今より女の一念にかけて日夜心組み候へば、決して見苦しき姿にては参るまじく候まよ、このこと必ずく御わすれなきやうくれぐれもたのみ上げり、なほく申し上げたき事は山々ござ候へども胸いたく氣も心も涙にかきみだされて、あらく、

旦那さま

し
ま

わけて願ひ上げ候事は、あつさ寒さにつけての御養生また御酒は如何やうの場合にても一合ほどに御止め下されたく念じ上げり、手文庫のうちより一昨年御うつしあそばされ候寫眞一枚、これは二度の御目にかより候

まで朝夕我身に添へて大切に守りり、

金子百圓このうち三圓を引き去りて九十七圓、たしかに御枕元へ差上げ置き候、さだめしふしぎとはおほしめしもさッし入り候へども、いづれ後に相わかり候金子に候へば御こころおきなく御つかひ下さるべく候、かへすくも御身大切と、御酒の一合かぎりにねがひ上げり、

親の死目と兄弟の變死と自己が向脛を花崗の切石に突き當てよ西瓜のやうに打割ツたる外は、溜め涙のつどいて落ちしことなき黒田健次も、前夜の夢さめて今朝の枕頭にお島が遣せし書を見し時は、宛ら電氣作用にかけられしが如く、おもはず總身を震はして目鼻を一處に寄せつよ、腸より湧き出づる熱涙ほろく、とこほしぬ、

あとに残りて一片の書に連れ添うてより七年の春秋を泣き返せし健次の哀れなるや、かくまで苦勞さしくを重ねて心にもなき別れ路を我ながら急ぎしお島の哀れなるや、たとひ聖賢の肉筆なりとて過眼雲煙、容をあらためて拜すべき男ならねど、妻が残せし書殼を取上げて幾度も押し戴きつと、生涯うまれて泣く面でもなき横著漢の聲を呑んで泣き伏したる體、美人の紅涙手行よりも一入の悲慘を添へぬ、

さるにても怪しきは眼前の百圓、今この貧乏世帯には十千萬兩とも見るべき百金、いかにして手に入れしぞ、何として工夫せしぞ、たとひ死晴れの一回たりとも我ためには三日と隠し得ざりし女が、百圓といふ金ものよ半日も秘め置くことなるまじ、さらばいづれ至急に拵へたる百金、はて訝しや、あはれもし女心の思ひつめて淺ましく悲しき涙と血とを賣つたる金にはあらざるか、あれほど細々と長き文に百金の筋道さらに言はぬは愈々不思議の一事、か

はいや良人のため芝居狂言また小説本の端くれに狼狽へたるにはあらざるか、とまれ、かくまれ、この書は我ための大智識、この金は我ための大鐵槌、腸より得たる智識を張つて皮肉より得たる鐵槌を振り翳し、むかふ浮世の難關難道やはか破らで置くべきや、こゝに健次が兩の眼の光れるかぎり、手足四本の自由に動くかぎり、専念の力瘤、一心の進退、まてよお島、その涙一滴を空にはすまじ、その胸一寸の痛みには我五體を碎いて、おのれやれ、

百人の友に圍まれて七晝夜の極陳に逢ひ、千人の敵に責められて白刃の襖に包まるとも、持つて生れし死骨抛け出しの根性は其まよの男、こゝに妻が假名まじりの禿筆に翻然として生れかはりし如く、たゞ家内を見廻して今更に戀しく懐しけの兩眼に涙一ばい、あの破れ傾いたる猫の額の臺所こそ彼が朝夕の苦勞を重ねし泣場なれ、あの曲みし縁端の柱こそ彼が妻

れし身を倚せて空ゆく雲を打ながめし吐息の形見なれ、

うまれ故郷に用なき骨の棄てどころ浮ぶ瀬もあり沈む淵ありとは、むかしの江戸を唄ひしもの、今も何處よりか集り來つて土一升金一升を掘り返さむとするもの、葎町の軒竝びに男雇人口入業の金看板いつも砂煙を破つて磨きたてたる下に、大道へ溢れて朝の東天ごろより宛ら飢饉年の施米を貰ふに等しく、番臺に取り付き火鉢にしがみつき門の溝板に髻を揃へて、すぎし全盛を夢の泣言たらしく往來の耳を聳するばかりの中に、おもひきや默然として兩腕くみながら柱を楯に自己が順番の來るを待つもの黒田健次、三十年の腸に宿る十千萬兩の野心を掴み出して更に鏝一文より土砂を喰つても這ひ上らむとする満腹の大經綸、胴巻に九十五圓の金と妻が形見の書殻一片を藏せる外は、こよ半月を空に過すべき用意の飯代わづ

かに三圓

望むところは大會社が大銀行の頭取支配人、もしくは當世の利物と稱せらるゝ紳士紳商の立關番か、それ叶はずば小使、下男、飯炊、風呂焚、なんでも差支なし、給金は鹽を舐めても三度の飯の外は番茶一碗の好みもなし、また主人は如何なる癩癩持でも殘忍酷薄でも構ひなし、細君の専横、親類縁者の干涉、娘子供の我まよ氣まよ更に頓著なし、氣骨の折るよは生命のつどくだけ、眼の舞ふ忙しさは眼球の流れいづるまで、およそ一晝夜に三時間の寢床さへあらば大願成就との注文に、偕も珍らしの奉公人として忽ち差向けられしは岡本重正とて世に聞えたる大紳士、會社銀行とりまぜて礎かたき九個所の頭取社長支配人専務取締等を兼ねたる上、別に一個の財産は人傳へて百萬に近しとぞいふ、
いくとせの阿彌陀かぶりに空を睨みし古帽子、さては浮世の雨風に曝して色さめ果てし五所

紋の黒羽織と、年を経し絲の亂れの苦しげなる縮緬の兵兒帶、縞からの褪けたる米澤の下著、猫足の消えかよりし大島紬の上著、以上ひツくるめて委細かまはず見倒しの古著屋に抛け込み、得たる賣價のうちより更に雙子織の布子一枚と淺がた木綿の襦袢に綿ネルのシャツ木地の安下駄、身につけて現れたる黒田健次は心がらにや例の横著面も殊勝氣に見えぬ、満都百萬の蕨を兎跳ねに跳ね越えて身は青雲を突き破らむとせし突飛の男が、雨にうたれし紙細工の如く心機一轉しよんほりとして髪の手さへも動かさぬ慇懃の體、あはれお島に見せてやりたや、お島いづこに何をして世を渡らむとかする、あはれお島に見せてやりたし、

黒田健次いかに變れど黒田健次、元來の黒白は其性なれども、勃々たる野心しばらくこよに空しうして、動ともすれば咽喉元に込み上げ來る駄洒落を謹み、おもはず吹き出でむとする

駄法螺を押へ、惡口、雜言、罵詈、嘔吐、鐵面皮、のんこの酒ア、およそ今日まで自ら好んで世に反し人に背きし萬事の調子を抛ちつと、いはど魂魄ぬけがらの身一個を紅塵百尺の大俗界にあづけて、たゞ人しれぬ方寸に時を待ち機を覘ふ其後の健次、そもやいづこの山出しかと疑ふばかりになりぬ、

されば健次ほつと出の田舎者として口入屋の帳面に黒星をつけられ、まづこれならば御徳用向の下男として赤紙づきに差向けられ、住み込みしは幸ひ都下の十指に數へらるゝ當世の大紳士岡田重正、二三日の居心地いかにと問ふまでもなき健次が一所懸命の働きに忽ち家内中の評判者となつて同じ奉公人中にも可愛がられ、今度の奴は感心だよ、あの新參なかゝかせぐぜ、目をかけてやれ、どうやら物になりさうだと先づ朋輩の用に追ひ使はれて主人の耳にも聞ゆる道理、宛ら器械の如く駈け廻つて立働さぬ、あはれこの器械しばし狂はであれか

しと、神かけて朝夕の涙に祈る妻のお島は何處に居るやらむ、

主人の岡田重正は世に聞えたる當時の利者、まして九個所の會社銀行を引き受けて綱曳車に駈け廻る身なれば、常に一寸の暇なけれど、祭日と日曜は世塵の外にありて家の内の太平樂、けふも其日とて奥まりたる茶室に我みづからの御手前ぶり、障子の外には例の健次が庭箒とツて飛石の隈々までも落葉を掃き寄する體、こよ一枚の障子を隔てよ今は上下の分こそあれ互の身に吉凶の裏表、神ならねば知る術もなし、

隔ての障子さらりと開けて顔さしいだしたる主人の岡田重正は、としごろ五十の上を四歳五歳、でツぶりと肥りし中男の、ちらく鬢に白髪はあれども八字の口髭のみは眞黒に、羽織も上著も下著も大島袖の常著のまよ、「おい汝が、此ごろ來たのは、大分よく働くさうだね」もとのまよの健次ならば空嘯いて鼻頭の一矢、全體うぬが吐く舌の音か金の鳴る音かと持

てる庭箒ふりあげて眞向より掻き落すべき筈ながら、かくなりて斯くと心を定めし今日の健次、はツと驚いたる體に振り返ツて、飛石の上に跪きつゝ頭を下けぬ、「これは旦那様で御坐いますか、さすが御大家だけに御奉公まうしてから五日目の今日、はじめて御意を得ます、萬事足らぬがちの者、何卒以後よろしくお願い申し上げます、はい」いひつゝ額越しにジロリと睨みあけたる稻妻の大眼球は、危しく元のまよの黒田健次、

朝夕すきまもなく會社銀行の俗務に驅られて乾燥無味り堅齋、二日ひ廻され、一瞬の眼球の運びに百金の損益を招き舌一枚の間違ひに忽ち千金の事に身も心も忙しき境涯は、また時に戯れて馬鹿口をきくの娛樂、また時に下男下女と語ツて無上の快とする習慣、こよに岡田重正も徒然のまよ庭箒もてる新參の健次を呼んで一

言一言のうち、どこやらに面白けのある男と思はず乗り出して、煙草の煙を吹きながら身上を問ひかけぬ、

『むよ全體、汝は何處だね生國は、いつごろから東京に來た、いくつだ』健次なほも庭の飛石に跪いたるまゝ頭を垂れて慇懃の體、『はい、うまれば大和の者で御坐いますが、片山里の猪や猿と共に朽ち果てむも残念と存じ、親なし兄弟なし親類縁者なしの一本立が結句の幸ひ、十七の時、何を的ともなく身に一錢の用意もなく、申さば乞丐半分で東海道の膝栗毛、この東京につきまして以來、おのれの分相應に立ン坊でも致しますれば宜かつたものを、なまなか強情骨を突ツ張ツて生學問の下手定規、十餘年の苦學難行なンの功なく』むよ、そいぢやア何だね、書生あがりだな』はい、まづ左様なもんで御坐いますが、翻然と志をあらため書を抛ツて三十男の小僧奉公、何分に此上とも御目かけられまするやう、よし貴様ア役

に立たシから出て行けと仰せられても、幸ひの御當家、お袖に纏ツても一年と二年は』しかし、十餘年も苦學したものが俄に下男奉公せずとも宜いちやアないか』なるほど月に二十三十の端月給は、いかやうにもなりませんうが、姑息彌縫の策は却ツて一身の不覺卑怯、生涯を打算して最後の不利益と心得ましたから、みづから信じて身を落せば飽くまで忍んで落つる底まで、なまじひ中右の迷ひは斷じて眼中におかない決心で』おもしろい、して最後の目的は何だね』願はくば天下の經濟を動かし得らるべき人物の、たとひ一目なりとも御覽を蒙ることあらばと』なるほど、翻然として實業界に出て見たいんだな』千里の駒の尾につく蠅は竟に千里を行くの世諺』

たとへば三間の梢に飛び上らむとして幾度か飛び損ね跳ね損ね、果は腰骨したよか打ツて其

まよ仆るべき痛さも、元來こいつ死骨抛け出しての強情者、その痛傷を忍んでは又もや飛び跳ね、飛び跳ねては又もや顛倒り、さすがの男も金鐵の身ならねば、こゝに氣も絶え息も切れたる折しも、つらく前事の愚を顧みて心機一轉、翻然として悟つたる今よりは、いざや十餘年を夢とみて元のいろはに立戻り、三間の梢に足るべき三間半の梯子を求めて、一段々々悠々と上り行かむの決心に、おつる底まで身を落して當世の豪商岡田の家に住み込んだる健次の面つき、もしや知る人の眼より見れば猛獸しばし飢ゑて檻に飼はるゝが如し、夜更け人定まつて物置小屋に隣れる疊三枚一室のうち、これぞ今の我城廓として健次たゞ獨り枕頭の二分心ランプに荒土の喰み出でたる屋根裏を見ながら、あけて人にも言はれず顔色にも出せぬ心の一物、繰り返しては我みづから問ひ、繰り返しては我みづから答へ、自問自答の苦しさを誰かは知る、幸ひ今日は主人に逢うたり、逢うて彼なるとか我を見たらむ、

我は彼を一日に與みし易しと見たる眼の、そもく、中りしや中らざりしや、しばしこのまよ謹直の下男となつて一月二月を過しなば、忽ち吉凶の効果あらはると共に猿臂を伸ばして引ッ掴み、掴みし上の活動はソロソロ元の黒田健次、それも一年の後、せめて一年の後、あはれ一年の後に身を立てずんば我もはや世に甲斐なし、大俗に跳ね出されたる身一個を引き摺ッて故郷の山中に閉ぢ籠り、おつる木の葉に屍を埋めむのみ、とはいふものと思へば哀れなり妻のお島、さても其後いづこ如何なる浮世に流れて何を世渡りに憂身を憂すらむ、おもはず手は胴巻に觸れてお島が遺書を取り出しつと、これほどの男こゝに遊治郎が花里の艶文殻を繰り返すが如く、悲しけに樂しけに苦しけに哀れけに果は其まよ顔に押し當てよ、今宵一夜を何として明かさむ、

門外の事は良人の口より家内の事は妻の口より、互に逢うて語る言葉に齟齬なければ、佛神の力をからずとも家内安全延命息災、これに上こす人間の幸福はあるまじ、

されば岡田の一家も、主人は世にいでと寸暇なき繁忙の身、妻は大家を控へて朝夕のつとめ、しかも夫婦もろとも五十の阪に上り四十の上を越して、すぎし春の花は夢となり今は萬事を秋の實に、言葉の端までも更に浮きたる色はなし、

「近ごろ来た、あの下男ね、ありやア和女の眼でどうだい、間に合ふかね」あれで御坐いますか、あの者の事については、妾から申し上げようと思つて居たところで、口入屋などから參つたものには、なか／＼めづらしい感心な男で御坐いますよ、何をさせても仕損じはなし、用事を言ひ付けると返辭の終るか終らないうちに直ぐ起つて働きますし、また分らない事は最初に幾度も聞き直して、そして無闇に世辭をいふでもなく、また人が見ないからつて

骨を惜しむでもなく、まづ近來の拾ひ者で御坐いますよ、第一良人、あれの朋輩どもが感心いたして居りますもの「むと、さうだらう」さうだらうツて良人、よく御存じなの「あよよく知ツてるよ、おもしろい奴だと思ツてるのさ、それも山だしの田舎者ならだが、この東京で十餘年も書生した奴だから猶更ら珍らしい「おやく／＼あれは十年も書生した者で御坐いますの「さうさ、ところで、あよして庭掃除や風呂焚をさせておくも可哀さうだ、どうか工夫して一番こゝろみに使ツて見たいやうな氣がするのよ、しかし人間は半月や一月で本性の分るものでないから、油斷も出来ないさ」そいぢやア良人、當分のうち、どツかの社の小使にでも「いや／＼いけない、乃公は一切、自分の關係して居る會社に自分の口から人を入れな

い決心だから、そこで、まづ、あの足を洗ツてやるのよ、下駄か雪駄を履くやうにしてやるのさ、庭で使はずに席上で使ひ道はないかね、玄關にでも置いてやらうか」玄關より、いッ

そ、どうで御坐います、臺所の取締に『むよしかし、根が書生あがりと来て居るから、いくら働いても穴違ひだよ、だから當分まづ家の外使にしておけ、手紙を持たせてやったり、其外いろんな外廻りの小使にさ』なるほど、それが宜う御坐いませう、あの分なら物の間違ひはなし時間の後れる氣遣ひなし、そして第一に理非が早う御坐いませうからね『さうだ、彼奴ずるぶん小むづかしい事でも、やって来る面つきだぜ、しかし氣を許すといけないよ、全體が馬鹿正直でないから』

うまれながらの善人よりも悪を知つて後の善人は尊きの道理、田舎ほつと出の正直一片は都の風に吹かれて前途に狂ふの恐れあれど、さんぐ狂うて浮世の酸いも甘いも知りぬいたる果に我から悟りし正直は却つて物堅き今の健次、岡田の下男となつて以來なほさら其身を謹

み其口を衝みつゝ、例の駄法螺酒落は夢にも出さず、日夜の骨を粉にして働く風情さながら電気作用の器械に似たり、されどこれまでの健次を知るものなければ、主も朋輩も眼前に見る質朴の健次、あいつ元來なにを娛樂に生きて来たぞと疑はれぬ、

『おい健公めづらしいな、どうしたい、ほんやりして、身體でも悪いのかね』いひつゝ入り來りしは岡田の抱へ車夫、今日は主人が不意の横濱行に思はぬ一日の骨まうけ、しかも聊か酒氣を帯びての談話敵手に、どつと身を横たへ腹這ひながらの煙草を吹けば、えゝ煩い、牛馬に用はないと叫ぶべき健次わざと満面の笑を浮べて、『やア、たいそう御機嫌ですな、ハ、ハ、』なアに、あんまり御機嫌の體でもねエが、鬱いだつて金が出来る理ぢやアなしよ、やけ半分の浮世だアね、時に何か面白い談話でもしてくんな、おめエは大した學者だと聞かして『學者、あの私ですか、誰がそんな事を申しましたな』かくすな、この野郎、知

ツてるぞ、書生あがりだらう、しかしそれにしちやア感心なもんだ、全體また何うして斯んな業をするんだか、いはれ因縁するぶん深かりさうだな「アハ、ハ、ハ、深いも浅いも見た通りの木偶人で、いはれ因縁なんか少しもありませんよ、なるほど、書生あがりには相違なしの遣り損ひ、ホーカイ節に落ちなかつたのが先づ出来でせうよ、時に私の書生であつた事を、どうして誰にお聞きなすつたね」「主人にさ、親玉によ」「旦那様によ」「あの新参者は書生だつたといふ事だが、きさま、よく調べてみると命令ツたのさ、おめエの身の上を」「なるほど、旦那様が、へエ、ところが別段これといふ仔細も何にも無いが眞實ですよ、かりにも十餘年の書生した身に仔細がありやア、まさか斯んな奉公もいたしますまいよ」「おツと待ちな、仔細ありやアこそ斯んな奉公をするのだらう、かくさずに言ひねエな、ぶちまけたツて爲の悪い事を告口する人足ちやアねエ、つまり親玉が、おめエに何か見込があるんだらうよ、吉

だぜ吉兆だぜ」「吉が凶が知りませぬが、斯んなに斯なツた外、全く何の仔細もないです」「いはねエな」「いはないちやアない、いふことがないんです」「さうか、そいぢやアまづ其通りとして、時に先生、おめエさん何時まで當家に斯うして居る心算だ」「お暇の出るまで、役に立たないから出て行けと、いはれるまで辛抱して、せめて金の五六十圓も拵へる考へで」「ぢやア何だね、給金しこための決心で」「まづ、さやうで」「その給金をためて、どうするのだ」「百圓近くにもなりましたら、國へ歸ツて鶏でも飼ツてみようかと思ひます、どうせ意氣地なしの私なんざア、東京に居ツたツて無効ですからなア、萬事あきらめましたよ、へエ」「いやに吝しい料簡を出すねエ、その面つきたア大分ちがツてるぜ」「この面で御酒は一滴もいけません、あなた酒鹽にでも酔ひますもの、から外見だふして人一倍に損をしますよ、損たツて別に大した損でも御坐いませんが、とかく氣が小さいと自分でも折々、心付きながら、や

ツぱり生來で、ハ、、、、』

岡田重正が今日の地位を得たるもの、半は内助の力にありと持て囃さるゝ其妻女は、ことし四十の上を六つ七つ何處に隙間もなき大紳士の夫人、あれが左袂とツた昔の花の餘波かと、思へばまた何とやら打解けて野暮ならぬだけ、萬事の捌きも圓く家内一切を引きしめて、天晴れ御大將の陣營をぞ守りける、

一室のうちより手を鳴らして侍婢を呼びつゝ、あの近ごろ來た下男すぐ此處へとの急用、何事ならむと健次まかりいでゝ慇懃に兩手をつけば、妻女しづかに振り返りて言葉やさしう、『たいそう汝は評判が宜いよ、よく巧くツてね、なほ此上とも氣をつけて勤めておくれよ、此方にも眼はあるからね』はい有難う御坐います、いやもう、萬事かけだしの無器用者で御

覽の通り何のお役にも立ちませんが、たゞ御奉公大事といふ事だけは『それさ、それが何よりだよ、時に汝ね、いつまで下にはばかり働いて貰つても氣の毒だから、ちと外の用をして貰ひたいの』へエ、外の御用たア、全體いかどな事で、あまり荷が勝ちましては脚下が覺束なう御坐いますから、今しばらく此まよ、これが私の分相應かと心得ます、はい『なアに別段むづかしい事でもないのよ、たゞ汝が今の用を止してね、そして、あの手紙や何かの使ひ歩きに、とかく、これまでの男は字が讀めないから、をりく、間違ひなにかあつて困るのよ』はア小使で御坐いますか、いやそれならば勤りませう、しかし朝から夜まで引き續いて御用のある筈も御坐いますまいから、その間には何をいたしませう『それ一役で當分よろしいからね、隙があつたら自分の好いた事でもするさ、時に汝は何が好事だエ』ハ、、、、只今の身分で、ものゝ好き嫌ひなにか決して有らう筈は御坐いません、たゞ運を天に委し

て三度の御飯を無事にいただくのみの事、まづこれを以て人生の快といたして居ります、心
 あつて見れば路傍の小石も私に對うて笑を含むが如く面白をかしよう自分から氣を勇めて暮
 す心算で、一切の嫌ひが御坐いませんから一切の好きもない道理、そこで『そこで、どうな
 るんだね』いや御免くださいまし、奥様に向うて失禮な、つい、おもはず、へエ何分よろし
 く願ひます』あら、ごまかしたよ、かまはないから面白い談話を聞かしておくれなね、なん
 だか汝には世間尋常を外れた呵しい物語がありさうだよ、これまで細君を持つた事はないか
 ね、なアに細君にかぎらずさ、懺悔談話をおしよ、きつと何か、あつたに、違ひなからう、
 ある顔つきだよ、ホ、、、、『御戲談を、夫人この面で御坐いますもの』いよエ、その顔
 が却つてある顔だよ、妾には、ちやアンと見えるの』この面が却つて、却つてとは聊か恐れ
 入りましたな、ハ、、、、『だつて汝、きけば十餘年も書生した人がさ、俄に翻つて下

男奉公するには、何か其間に、その何かと女だらうと察するのさ、どうだい、さうだらうね
 『ハ、、、さう仰しやれば、づうくしく申し上げますと、いはれない事もない身で御坐
 いますが、さて申し上げたところで溝板の上におツこちた木葉一枚の音もいたしかぬるほど
 の儀で、ハ、、、いづれ後日に、どうか今日は此まよ』ちやア、また聞きませう、その
 かはり旦那と二人ならんだ前で聞くよ、いとかエ』よろしう御坐います、つれづれの御なぐ
 さみに戀の端の浮世の裏、おもてむき申し上げて御一笑を願ひませう、』

金ならば十千萬兩の遣り取り、家ならば天下に五本の指を折らるゝ大家の存亡、會社ならば
 人心の顛倒る大騒動、もし一個人ならば生死の境目に關するほどの大事を抱へて、天晴こ
 の腕を試さむと思ひし健次も、いたづらに變物と笑はれ狂者と謗られ可憐ら神算鬼謀また駄

法螺となつて茲に十餘年の今は、あはれ何事ぞや風呂の水汲みと庭掃除の勤勉とに腕を試されて、あの男どうやら間に合ひさうだと見込まれてからが、やうく一家の私用に手書を携へての走り使ひ、しかも役附の第一番に命ぜられたる急用は、岡田の妻女が明日の芝居見物に親類七軒の女子供を驅り催す俄の用意、ついでに茶屋を談じて辨當の好みまで、されど今の健次は唯これ命に従うて、主の御用といへば横町の牝犬にも頓首再拜せむばかりの質朴柔順なる健次、その一書を大切に懐中へ捻ぢ込むや否、七軒の回状くるりと廻つて二里にも餘るべき道程を、かくなりては斯くの仕合はせ凡俗に對する働きぶり、およそ一時間餘に悉く返答とつて歸らむものと、かつては鐵石よりも重き尻を軽々とひツからけたる素足の韋駄天に、額の汗を拭きながら生來の大眼球わきめもふらで駈け出す風情、墮落書生の喰ひ逃げか巾著切を追ツかくる勢ひか但しは友達の急病に下宿屋より飛び出したる醫者さ

れが、いづれにしても尋常なるもの怪しの風體に、往來の人も思はず足を止め眼を欲てよ見返る其中に、もしやお鳥のあるならば何とかすらむ、いかに狂うて泣くやらむ、きのふまでは米櫃に蜘蛛の巣を張るとも驚かず、破れ疊の上に大の字となつて天井の節穴を數へながら、ますく蔓延る貧乏神の澁團扇に枕頭をあふがれ、債鬼四面に鬨を擧ぐるの眞只中を、とかく浮世は斯うしたものよ、生命に別條ないわいなと鼻唄うたうて平然悠々のこの酒アたりし横著漢が、白粉あがりの半婆を主と崇め奉つて假名まじりの下手糞手紙、しかも明日の芝居に親類の女原を驅り催すために、大の男が向脛に風を切つて砂煙の中を一文字に馳け行く今日の健次、そもや何の業なりける、いかなる心の一轉ぞ、さては又どれほどの野心あつての苦節ぞや、

鐵道馬車を駈け抜け抜け綱曳きの人車を追ひ越して、一所懸命に馳せ行く途端、南無三寶、あは

れや小石に躓いて伏し顛び、人に指さし笑はるゝのみか、何心なく自己が脚下を見れば黒血ながれて生爪を剥がしぬ、さすがの健次つらく打見て、おもはず兩眼に涙を浮べぬ、たとひ片腕きり落さるゝとも斬り落さるべき仔細あらば冷笑一番、さらに蚊に螫されたほどの澁面も作らぬ我ながら、これにつけても何處に何をして暮すやら痛はしの島よ、せめては夢になりと通ぜよかし、我も今は斯くなむと、

風呂の水汲さては朝夕の庭掃除に骨を碎いて惜しきものと見抜かれ、やうく一段の地位を進められて岡田夫婦が手廻りの小使となり、また小使の役目さらに脱落なく身を抛って晝夜の勤勉およそ一月の後には、根が書生あがりの一時と思ひの外あの働きが當坐の洒落にてなるべき業か、なるほど何をさせても一所懸命の奴、よくく本心からの忠實しき男ぞと、首

は、健次に金看板を掲げぬ、

されどこの金看板は元來の健次に取って鼻糞の丸薬とも思はず、まづ悟つて後の我のためには抑々の序幕、いざや、これより演ずる舞臺の本藝御覽なりませと、いよく内外に向うて淺黄頭巾を面深に被りつよ、日夜平身低頭の間にて得ならぬ一種の愛嬌と世辭を浮べ、時に人を笑はせ人に笑はれながらも、踏まれた草に花さく春の野邊を待つ心地して、むらくと湧き出づる方寸の策畧を其夜々々の夢に包みぬ、
けふの風に向うて眼の中に大道の塵埃を打ち込まれた、鏡があらばと奥の小間使に借りたる懷中鏡を二分心のランプの下に照らして夜更け人定まりし後、じつと眼を定めて我みづから我を見れば、わづかこゝ二月ばかりがほどに顔色どうやら青ざめて、いつしか頬の肉さへ瘦せたる心地、さもさうづ、さもありなむ、鐵石の身ならねば此ごろの乃公、あはれ英雄も

下司奉公の菜葉に腹を叩くの今は何とせむ、人すよまざるにあらす實に馬すよまざるが故なり、

すよまざる馬これを急に鞭うつては却つて瘦せなむ荒れなむ、誰か知る暫しこよに秣を飼うて靜に鬣を撫で尾坪を整へつよ、ことしの秋の空たかく嘶く聲の肥えたるころ、いざや一鞭くれて浮世の眞只中に歸り新參の曉は、いかに面白からむ、いかに快からむ、おのれやれ、さるにてもお島が残せし書の端に、せめて一年、あはれ一年、もし一年を過して後たとひ元のまよなる我なりとも、十年の榮華に代へて呼び戻せよとは、まことに我を勵ます天使の命令、されば我またこの一年間を生還と見て、空しく過さば生きて甲斐なき屍の健次、ぬかるな、油斷大敵と自己が胸間を叩いて大眼球くるくると剥き出しぬ、

健次が岡田夫婦の手許の小使となりし時、第一番に命せられたるは妻女が芝居見物の誘引書、それさへ石に躓いて生爪を剥がすほどに勤めたれば、いよく愛せられて益々いそがしき身となりし三度目の日曜に、はじめて主人の重正より命ぜられたる一封の書狀、これを根岸に住める倉橋幸藏といふ人の許へ持参して返書を持ち歸れといはれし時は、さすがの健次あつと驚いて殆ど死毒を舐めたる如き苦しの息に、「かしこまりました」

人もあるべく日もあるべきに、倉橋幸藏、しかも彼奴が在宿すべき日曜日、あはれ何とせむ、由來十年の舊友たる我を三十六錢の日給に辱かして更に氣の毒とも思はざりし奴、また職を辭して後わざ／＼禮を厚うし言葉を卑うして頼めども絶れども、口説けども、穴のある鑊一文も貸すこと無用、君の如きものを朋友とするは名譽に關するとまで吐したる奴、おのれ畜生ふざけたるかな、他日この健次が二頭立の馬車を立關に乗り掛けて微塵に碎きくれむと

心に誓ひし其倉橋幸藏が許へ、何事ぞや宿志いまだ成らずとはいへ一家の私用に追ひ使はるる走卒の奴となつて書狀持參の役目、それも彼奴が在宿すべき日曜日とは重ねぬの無念なり心外なり、たゞ願はくば立關のみに事の濟めかすと祈れども、取次の小女郎まで我この面を見知れる辛さ何とせむ、かつまた文通の往來あるからは本人と本人との往來もあるべき筈、幸ひにして今日まで彼奴の訪ひ來し事はなけれど、いつ何時に來つて我と面を合はすやらむ、面を合はせば忽ち現ると黒田健次が由來の本色、さらば岡田の家に斯くまで骨を碎きし甲斐もなく、其坐に萬事めちやくの破滅、あはれ南無三寶、

健次おのが部屋に太息ついて眉を擧めしが、さらに心を翻して何とか感じけむ、忽然むく／＼と起き上つて例の尻ひツからけたるまゝ、家を飛び出して根岸の方へ一文字、されど倉橋幸藏といふ門札の四字を見し時は、おもはず一種の感に打たれて胸ぎツくり、勇

氣一番まゝと飛び込めはなれた何たる事ぞ、主人の幸藏め今しも人車を命じて立出でむとするのみか、いづれも我を見知れる書生小女郎の輩まで玄關へ送りいませし眞最中、健次もはや更に動せず、倉橋が乗れる車の脇に立寄つて中腰となり、うやくしけの兩手に奉る一封の書狀、これは御當家の旦那様で御坐いますか、私は岡田の召使、この御返事いたゞいて歸れと申し付けられました、はい、御出がけに甚だ恐れ入りますが、どうか御返書を、はい、はい、倉橋幸藏おもはず一驚を喫して車より飛び降りながら、兩眼の涙はらく、健次の手を執つて暫し無言の後、黒田、黒田

心の野心いよく、勃勃として天空を走れども、身はこゝに人の奴隸となつて地上を駆け廻りつよ、せめて半年の屈を忍ぶは正しく前途の半年を伸びむがため、一封の書狀を携へて飛び

込んだる家は由來十年の舊友、しかも散々に辱かしまれたる怨恨の火焰いまだ消えざる倉橋幸藏、その幸藏奴が今しも車を命じて立出でむとする轅の前に殆ど土下坐の體、恐るゝ慇懃に差出したる健次が心中、いかにあるべきぞ、わけて人なみゝに飛び出でたる豪放不羈の男一貫、

さすがの倉橋おもはず車より飛び降りて、健次の横顔じつと見詰めながら、黒田、黒田と二聲三聲、聲を震はして呼べども健次とほけて更に知らざる體、ますゝ恭體こゝに謙遜ツて頭を自己が膝頭に叩きながら、『はい、え、黒田は私の苗字で御坐いますが、旦那様がた御存じの筈もなし、これは何か人間違ひで在ツしやいませう、私は近ごろ慶庵から參ツた岡田の召使で、はい、御戲言を仰しやらずに、どうか御返事を』

倉橋幸藏さてはと感歎の膝を打ちつゝ、まづ玄關へ送りいませし書生下女を追ひ退け、車夫

までも彼方に運び遣りて後、しづかに帽を取ツて言葉を清めながら、黒田、もはや多言を要せずだ、きくに及ばず君の決心は分ツた、あゝ今にして始めて黒田の黒田たる所以を了解したね、僕などの敢て企て及ぶところにあらずだ、實際その覺悟なくンば無効だ、その行なくンば元來の君にあらずだ、しかし僕が君に盡した過般來の本心いまだ打明けけるの機でないから、それは先づ其事として、願はくば猶よく岡田の下に屈して他日の大に伸びむことを祈るのみだ、僕また岡田に逢ツても、君のこと、さらに口へは出さないから』いひつゝ手を執ツて下げたる頭を上げむとすれば、健次いよく腰を折ツて恐縮に堪へざる如く、『いや恐れ入ります、これは恐れ入ります、どうか書狀の御返事を』書狀の返事は今すぐに書くから、まア宜いぢやアないか、さう慌けないでも、あんまり態とらしいから却ツて呵しいよ、おい黒田、なんとか言ツてくれ、どうだ倉橋この風姿が貴様の眼に何と見える、随分おつたらう、

ついでに甘いものを喰はせろ、天を衝くの英雄しばらく路傍の草間に睡る位の氣焔は君に於て宜しくあるべき筈だ、人生の第一義と第二義、浮世の裏と表、白もあり赤もあり時に大なり小なりとは十年以來の君が口より聞くとところだが、エ黒田「これは旦那様、いろんな事を仰しやいますが、私には、さッぱり理が分りませぬ」

倉橋幸藏様と仰しやるのは全く貴方様で御坐いませうな、もし御門まで、倉橋も今は其意を得て容を改めながら、「むよ倉橋幸藏は乃公だよ、ちやア汝、きのどくだが暫く其所に待って居てくれ、今すぐに返書を認めるから」はい、かしこまりました」奥より硯と巻紙を取寄せながら、玄關に立ッたるまよ返書を認め、それと渡せば健次なほさら慇懃に受取ッて、直に馳せ歸るかと思ひの外、どうやら俄に歸りもせざる様子、唯うぢぢとして獅子ッ鼻を蠢かす風情に、倉橋おもはず眉を擧めて笑を含みながら、「何か忘れ物で

もしたのがね、をかしい様子だ、へ、へ、へ、別に忘れ物は致しませんか、へ、へ、へ、先刻から旦那様の吹かして在らッしやる御食は全體なんと申す煙草で御坐います、たいそう宜い馨りが「ハ、ハ、ハ、これか、これはマニラの葉巻だが、汝、すきかね」わたくし大好物、どうか一二本いたどけませんかな」倉橋ぶツと吹き出してポケットにあるかぎりの葉巻を掴み出して渡せば、健次しづかに受取りて其中の一本ばツと薄紫の香煙を吹きながら、尻ひッからけたるまよ悠々と立去る後影、なるほど落ちても枯れても健次は健次なりける、

岡田夫婦の面前に呼び出されて健次つくねんと坐したるまよ、何の御用と伺へば主人の重正まづ笑を含んで乗り出しぬ、「今日はね、別段これといふ用もないから、汝の身上談話を聞かうと思ふのさ、それも十餘年來書生した下宿屋住居の境遇よりやア過日、汝が妻女に言ッた

浮世の裏の端とやら、そいつを表向に聞きたいね』いひつゝハ、と笑へば妻女も口を添へて促しつゝ、『さア言ッてお聞かせな、嘘おもしろい事があるだらうに、ねエ』

さすがの健次どうやら進退ことに谷りし體、一文字の太き眉を顰め大眼球を閉ぢて暫し無言に差俯きしが、やがて振り上げたる面上に得ならぬ一種の笑を含みぬ、『こりやア困りましたな、せめて昔の花衣まだこの身につけて、いざや物語らむといふ坐でも組む位の勢ひが御坐いますなら、少々は乗氣にもなりますが、奈何せむ、惘然かくのざまと成れの果の今日、ハ、、、紙屑買が地藏堂の縁に腰うちかけて親の代の榮華を誇ると、一般で、ハ、、、ハ、笑ひ事にもなりませんから』

主人の重正いよく笑うて、『をかしいく、面白いぞ、その調子で一つ話して聞かせろ、なアに外に誰も聞くものはないから、遠慮なしに、おツびろけて』ちやア御免を蒙ッて、申し

上はほどの事でも御坐いませうが、堪ッて時の御一興に、しかし何だか妙な工合で、ハ、、、はやく聞かせろ、笑はずに『我みづから我を顧みて笑はずに居られませんほどのつまらない戀の片端、これでも私に一人の女、まづこゝに女が御坐いまして、その女たるやです、赤蠅あやまり結ぶ惡因縁で、私には十二分に過ぎた女、容貌氣質は大紳士の令夫人といはれても更に後れぬ女が、男もあらうに私の如きものよ妻になるとは殆ど月下氷神の結び損ひで御坐いませうな、ハ、、、なるほど、よほど美人だつたと見えるな、しかし女の評判記は其くらゐにして置いて、そもく汝に馴れそめた最初は『その女です、ある料理屋の女中をして居りました時分、私が瓦落々々書生の眞最中、ふいと一酌の對手として、さす盃の一つ二つが縁の端、つい妙な工合に呵しな鹽梅が混じて、ハ、、、此ところハ先づ淺黄幕、二幕目には其女ふらくと私の下宿屋へ訪うて來ましたね、いはゆる私

の下宿屋が其女の伯父に當るもので、その伯父なるもの先づ私を男と見込みました。が乃ち彼の不幸、しかし其不幸を七年間じつと堪へて夢にも怨み顔を見せなかつたのが、却つて今日この境遇に私の安んずるところで、ハ、ハ、ハ、ハ、

面白き奴、呵しき男、十年間も書生した割には珍らしく骨を惜しまず、さりとして馬鹿正直でもなく、恰憫の尻抜でもなく、どこやらに丸く野暮ならぬ妙あつて、また理窟をいはせれば飽くまで竝べて言ひたけの口元に、獅子ツ鼻を蠢かして人に恐れぬ面魂ほのかに、此方にさへ油断なくば先づ八方に間に合ひの拾ひ者とは、岡田夫婦が寢物語に上りし今の健次が批評なりける、一夜、主人の重正ふいと立出づる先は十五町以内とやら、車でもあるまじ、食後の運動かたなく、まだ宵ながら闇の脚下てらす提灯の役は健次、主従あゆみながらの物語、「おい、

も少しも言ひたいも言ひたいから構はず先へ、時に汝は全體なるの目的だね、乃公の家へは不意に來たのか、但しは望んで來たのか、はい、實は御盛名を慕うて、私の分際相應、出来るだけの運動いたして、やツとのこと御厄介になるまでの「むむ、さうか、ぢやアいつまで小使なつかして居る心算ではあるまい、何か其間に「はい、山海の珍味たちまち御手の鳴りに従うて集る中に、かくの鯨一尾、もし御膳の端にも上るやうな事が出来ました場合には、鹽焼になりと將また叩いて丸めて汁の實に遊ばすとも、鯨だけの味ひを御存分に「おもしろい、その決心が奇だ、もし其うち何か考へてやらう、しかし自分の所望と得意の藝は、那邊にあるね、まづ、そいつを聞かう「人事十中の八九は自由ならず殆ど天にまかせますが、さて得意、ハ、ハ、ハ、これでも一番やつて退けたいと思ひまするは、およそ通常人の避けて難しとするところ、大きく文章めいて申し上ぐれば盤根錯節の間に「利刀を用ゐて見たいと言ふ

のだね『根が錆びた露店買の小刀一挺、たど磨いで、地金の減るまで磨ぎ抜いたところ
 で、ちよいと一切り』『よし、わかつた、承知した、近々のうち汝の切味を試してみよう、
 しかし何を切らさうかね、ハ、ハ、ハ、ハ、』『まづ柔かいところより願ひあけませう、いざとな
 らば豆腐ぐらゐるが分相應かも知れませんで』『その勢ひぢやア、まさか然うでもなからう、時
 は今夜乃公の行くところを妻女はじめ一家の者に知らせちやア不可ンよ、宜いか』口をつい
 て馬鹿聲は出ますが、物と事に依つて祕密を守るの義は心得てをります、はい、御安心あそ
 ばして、いづれへなりと』『むよそれもよし、だが汝のやうな男に弱點を知らせるのは危険だ
 ね、少々の金縛では跳ね返りさうだから、ハ、ハ、ハ、ハ、』『いや、跳ね返つても用のない場處
 では案外おとなしい奴で御坐います、ハ、ハ、ハ、ハ、』

出るにも入るにも難電おと押しの人車を走らせて、風塵の中を韋駄天おとしと焦る岡田重正
 が、時代めいたる提灯の火に脚下を照らして悠々と歩みながらの落著點、そもや何處と健次
 ころに思案の臍を曲めつと、とある横町の小路に入りて、こよぞといはる門口を見れば、
 黒板塀に細格子の妾宅構へ、なるほど、なるほど、人しれぬ穴なくては叶はぬ當世紳士、さるに
 ても新參の我にこの弱點を知らする主人の心いかに、こいつ面白い中に聊か變だわい、
 『おい此家だからね、しかし、なほ汝に用があるかも知れないから、ちよいと暫く待つて居
 な、宜いかね』いひつと重正づいと入りて障子引き開けつと無言に奥へ打通りし體、あとに
 は健次あはれや下駄箱と竝んで上り口に腰うちかけながら、きけば奥の室にて幽に媚び笑ふ
 女の聲、あとすまじきものは下司奉公、何事ぞや天下の奇傑たる我こよに尻ひツからけたる
 まよの土下坐も同然、しかも手に取る如き浮世の春を餘所にて、飼猫にさへ内兜を見透か